お馬怪盗と悪魔の麻薬

暁月　麗華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お馬怪盗と悪魔の麻薬

【Ｎコード】
Ｎ２４３９Ｙ

【作者名】
暁月　麗華

【あらすじ】
宝石怪盗をやっている青年セヴィスは、学校で最下位の成績をとりながら、秀才の兄ウィンズとともに暮らしていた。
だが、ある日盗んだ真紅の宝石によって、異世界にトリップしてしまう。
その世界は、全く同じ人間が住んでいるのに宝石を主食とする悪魔が出没したり、人間を激変させる麻薬があったり、学校が悪魔退治をする『ネクロス』の養成学校になっていたりと、何もかも変わっていた。

それでも懲りずに異世界でも宝石怪盗を始めたセヴィスは、狂った性格をした銀髪の悪魔シュバルツにことごとく邪魔をされるのだった。

序章　真紅の宝石

今日は、兄のウィンズに馬鹿にされるだろう。
教師に渡された茶色の封筒を見て、セヴィス＝ラスケティアは思った。
昔のウィンズは、この封筒を開く度に偉そうな顔をしたという。
だがセヴィスから見れば、これはウィンズの機嫌を良くするものであり、自分の機嫌を悪くするものでしかない。
こんなもの、作る方がおかしい。こんなもの、何の為に存在するのだろう。
でも、見ないといけない。
セヴィスは教室に誰もいないことを確認し、封筒の中身を取り出した。

成績表と呼ばれる、忌々しい白色の厚紙に記された数字は、やはり五百分の五百だった。
「また最下位だったな」
突然セヴィスの横から現れたのは、幼馴染のハミル＝スレンダだった。
「お前っどこに隠れて・・・・・・」
誰もいないと思っていたセヴィスは、驚いて成績表を落とす。
「ははは っ放課後にセヴィス一人が残ってたら絶対成績表を見てるもんな。だから脅かそうと思って隠れてたんだ。いっつも銅像みたいに無表情なお前が、あんなに驚くとこ初めて見たから思わず笑っちまったぜ」
ハミルは成績表を拾ってまじまじと見つめる。
「へぇ～体育の成績だけはすげーな」
「テストなんて、どうでもいい」
と言って、セヴィスはハミルから成績表を勢いよく奪い取って鞄に

入れる。
「出た！名言！お前テスト終わったらいっつもそれ言うよな～」
「本当のことを言って何が悪い」
「別に？・・・・・・ていうかさ、お前おれから成績表奪うのすげー速くなかったか？」
セヴィスから返事はない。
「お前なら泥棒できたりして？まあこれ以上怪盗が増えるのは嫌だけどな」
「・・・・・・」
「聞いたか？また怪盗フレグランスの予告状来たんだってよ」
ハミルの父は『怪盗フレグランス特捜課』に所属している。その父を尊敬しているのか、ハミルはよく父の自慢話やフレグランスへの悪口を言ったりする。
それも、セヴィスはどうでもいい、の一言で済ましていた。だが、例外がある。
「予告状の通り盗むとしたら、今夜だよなぁ。今回の宝石があるビルは窓ガラスが頑丈だし、さすがのフレグランスでも割れないだろ？だとしたら逃げる場所が入口しかない。だから親父は入口に警察を集中させるんだって」
「そうなのか」
この話だけは例外だ。警察の防備情報を聞けるのは、このハミルと話している時だけだからだ。怪盗フレグランスの立場からすれば、この話を聞き逃すわけにはいかない。
「あれ？珍しくどうでもいい言わなかったな」
「そんなことどうでもいい」
「あ、言ったな」
「・・・・・・帰る」
「おい待てって！おれを置いてくなよ！」
セヴィスはいい情報が聞けたと思うと、本当に成績はどうでもよくなった。

ハミルはいちいちしつこくて、時には邪魔と感じるが、怪盗からすればハミルの存在は重要だった。

「なあ、お前のロッカーにこんなもん入ってたぜ」
セヴィスが学校を出る数分の間に、いつの間に人のロッカーを開けたのか。ハミルは路上でたくさんの白い封筒をセヴィスに見せつける。だが、セヴィスはこの封筒を知らない。
「何だこれは」
「おれは知ってるぞ。これラブレターだろ。この色男め」
「ラブレターだと？」
ハミルは封筒に貼られたハート型のシールをはがし、一枚の便せんを取り出した。その差出人を見てハミルは目を見開く。
「おいおい嘘だろ？ルビアちゃんだぜ？これ。おれあの子狙ってたのになぁ」
ルビアという少女は、学校内では有名らしい。だが、セヴィスはこれもまた知らなかった。
「ルビアとは・・・・・・誰だ」
「知らないのかよ！？ルビア＝クォーツといえば、学校一のお金持ちだぜ？」
「興味ない」
後ろでハミルのため息が聞こえた。
「そんなこと言ってると、誰にも好かれなくなるぜ。モテるうちに彼女作っとけ。おれなんかな、好きだって言ってもいつもごめんなさいの一言なんだぜ」
「生きて行く上で、女に好かれる必要はない。いるだけ重荷だ」
怒っているのか、黙ってハミルはラブレターを見つめている。
「大体お前は何人の女を狙ったら気が済むんだ。何回フラれても懲りないのか」
「へっおれは女の子と正義の味方だからな。だから美しい宝石を盗

んで女の子を悲しませるフレグランスは絶対許せねえ」
ハミルはどうしてすぐに開き直ってフレグランスの話題にしてしまうのだろう。こんな話題は、セヴィスを複雑な気分にするだけだ。と言うより、ハミルの話題全てがセヴィスを複雑にしていると言ってもいい。
「お前もな、この手紙をお前のロッカーに入れる女の子の気持ちを考えろ」
ハミルは手紙の束をセヴィスに押しつけると、くるりと背を向ける。
「じゃあな」
そう言って、ハミルは目の前にある自分の家に入っていった。
こんな紙きれ貰って、嬉しいのだろうか。セヴィスにはハミルの気持ちが分からなかった。
分かったのは、フレグランスの存在は宝石好きの女に憎まれているということだけだ。だが、いくら女に嫌われようと所詮は他人。セヴィスには関係ない。
そう思って、セヴィスは鞄にラブレターを突っ込む。それが、あの成績表の茶色の封筒に入ったことにセヴィスは気付かなかった。

ハミルの家の隣に、自分の家はある。ドアノブを握ると、テストの結果を馬鹿にするウィンズの偉そうな顔が頭に浮かぶ。
そう思うと入る気が失せる。そこでセヴィスはいつものどうでもいい思考を発動する。テストのことを忘れ、家の扉を開けるという我ながらなんともくだらない思考だ。
「ただいま」
家に入ると、おいしそうな匂いが漂ってきた。どうやら、ウィンズがハンバーグを焼いているらしい。ウィンズが脂っこいものを作るのはなんとも珍しい。
いつも栄養分を細かく計算し、おいしくもない健康的な食事を作っているあのウィンズが、ハンバーグを作っている。
「珍しいこともあるものだな」

セヴィスは一言呟いて、ウィンズのいるキッチンに入る。すると、
「遅いぞ。貴様、帰宅時間五時から三十秒遅れたな」
後ろを向いたままウィンズが言った。
「三十秒くらい、別にいいだろ」
「罰として、お前のハンバーグは抜きだ」
「なっ・・・・・・」
「今日のお前の夕食はこのウィンズ様特製健康促進定食だ。光栄に思え！はーっはっはっはっは！」
セヴィスは舌打ちしようとする自分を堪える。ウィンズが高笑いするときはいつもセヴィスが馬鹿にされた時だ。こうなったら反抗しても全く話を聞いてくれない。
「何がウィンズ様特製健康促進定食だ。ただの玄米を山盛りにしただけだろ」
「何か言ったか、馬鹿弟」
ウィンズはセヴィスを睨みつけてきた。
だがその顔面を覆う鉄仮面を、ウィンズは何故か料理中に着用している。それも眼鏡をつけた上に鉄仮面だ。
前にこの鉄仮面を初めて見たハミルは、笑いが止まらなくなった。
「その鉄仮面、止めた方がいいと思う」
「何故だ？料理に唾が入っては不潔だからな、このくらいは当然だろう？」
「・・・・・・クソ神経質が」
「フッ。料理（エサ）が出来だぞ。たんと喰らうがいい」
ウィンズは鉄仮面を外し、料理を机に並べる。その献立はどう考えてもおかしい。ウィンズ側には、美味そうなハンバーグ二枚に適量の野菜、白米だ。そのハンバーグは元々セヴィスの分だった。
それに比べてセヴィス側には、大きな茶碗に玄米の大盛りに、生の野菜、生卵。これが不味いウィンズの健康促進定食。ウィンズに逆らうと夕食はいつもこれだ。
「どうした？まさかこのウィンズ様特製健康促進定食が気にいらな

いとでも言うのか」
「ああそうだ」
「では、不本意だが貴様にチャンスをくれてやろう」
と言ってウィンズは水を一杯飲み、眼鏡を指で一度押し上げる。
「今日は貴様の成績表が返って来たのだろう？それが一番だったら、このハンバーグをくれてやろう」
「はぁ・・・・・・」
ウィンズが絶対に無理な条件を押しつけて、それができない人を笑うのは昔からだ。チャンスという時点で期待をするべきではなかった。
「フッどうせお前のことだ。また馬鹿みたいな番数を取って来たのだろう？」
「・・・・・・」
セヴィスは黙って茶色の封筒を取り出してウィンズに渡す。それをウィンズは慣れた手つきで開けて、成績表を取り出す。成績表を見たウィンズはすぐに笑いだした。
「はーはっはっはっは！！また最下位だと？笑わせるな！冗談も程々にしたらどうだ！」
「冗談じゃない。事実だ」
「こんな番数を取ってよく冷静でいられるな！僕なんて一番を譲ったことなど誰にもなかったぞ！」
「兄貴は特別なんだ。仕方ないだろ」
「全く、どうやったらこんな点数を取れるのだ」
そう言いながら、ウィンズは成績表を封筒に戻そうとする。すると、何かが引っ掛かって入らない。
「何だ、入らないぞ」
ウィンズは封筒に手を突っ込んで中に引っ掛かっていた物を取り出す。
「セヴィス、これは何だ」
ウィンズが取りだしたのは、先程ハミルがくれた女の子たちのラブ

レターの束だった。
「あっ」
取り返そうとするセヴィスを振り切って、ウィンズは便せんを声に出して読み始めた。
「『親愛なるセヴィス様へ。わたくし、あなたのことが気にいりましたの。よかったら付き合って下さいませんか？返事はいつまでもお待ちしています。ルビアより』・・・・・・だと？」
「・・・・・・」
セヴィスは頭を抱えて、黙りこんだ。
「貴様のような馬鹿を気にいる女がこんなにもいるとはな。最近はフレグランスと言う名の愚かな怪盗も出る。本当にこの世界はどうかしている」
それからセヴィスは一言も話すことはなく、夕食を済ませた。

夜十時半、セヴィスはベッドから下りて部屋の窓から飛び降りる。ウィンズは毎日必ず十時に就寝し、五時に必ず起きる。彼の生活時間は絶対厳守なのだ。
それに、その間は絶対に起きない。気付かれることはない。
セヴィスはこれを利用して仕事をしていた。仕事というのはもちろん、泥棒だ。
予告状の予定は十一時。十時半に、セヴィスのやる気のない死んだ目が開く。
（俺の名は怪盗フレグランス。嫌われようと関係ない）
セヴィスは、生まれつきの体術で屋根の上を飛び移る。何故こんなに人間離れした跳躍力を持っているのかは、セヴィス自身も知らない。
今日盗むのは、最近発見された未知の真紅の宝石『ブラッド・エヴィデンス』だ。
高値で買い取るから、どうしても欲しいという他国の人間が続出し

ているからだ。セヴィスは、そんな人間たちに宝石を売って金を稼いでいた。
セヴィスが金を稼ぐ理由は、特にない。ただ盗むのが楽しいというだけだ。
「・・・・・・」
宝石のあるビルの前にはたくさんの警察が立っている。入口の反対側に回り込んだセヴィスは、屋根からビルの二階の壁に飛び移った。
「スレンダ課長！今のところフレグランスの姿は見えません！」
「奴は近くまで来ているはずだ！十分に警戒しろ！」
ハミルの父ミストの声が聞こえた。警察はまだ自分に気づいていない。そのことを確認したセヴィスは、窓に自分の短剣を差しこみ、鍵を上に押し上げて、窓を静かに開ける。
この窓はハミルの言う通り割って侵入するのは不可能だ。でも窓は鍵さえなんとかすれば簡単に開く。たかが窓にこの怪盗フレグランスは敗れはしない。
中は真っ暗で、誰もいない。セヴィスの十メートルぐらい前に、その真紅の宝石はあった。
「見つけた」
だが、誰も警備していないというのも変だ。セヴィスは辺りを十分に見回す。やはり誰もいない。ハミルの言っていた、入口に集中させるというのは本当だった。
宝石を守るガラスの蓋を取って、真紅の宝石を盗る。
防犯ベルが鳴り響く。
「フレグランスが出た！！」
ミストの声が聞こえた。これで何度目だろうか。ミストの、
「しまった！」
という声を聞くのは。聞く度に、笑えてくる。
セヴィスは入ってきた窓から外に出て、再び屋根に飛び移る。
今回は楽だった。

家に戻ってきたセヴィスは、いつものように、真紅の宝石をベッドの下の宝石箱に入れようとした。
すると、どこからか声が聞こえてきた。
『ねえ、悪魔と戦ってみな～い？』
「だっ誰だ？」
焦ったセヴィスは窓や扉を見回す。誰もいない。
『ブラッド・エヴィデンスを手に入れるなんてすごいわぁ。普通の人間が触ったら燃え尽きちゃうんだけどね』
「この宝石が喋っているのか？」
『ああ、わたし悪魔の頭領のサキュバスっていうのぉ』
「悪魔？」
『わたしたちの世界はここと同じ人間が住んでるけどね、悪魔も住んでるのぉ。今度からわたしの世界のセヴィス＝ラスケティアとあなたで交代してもらおうかなぁ～って思ってるのぉ』
「何を言っているんだ・・・・・・？」
セヴィスは、悪魔の頭領サキュバスの言っていることが理解できずベッドに潜る。
『逃げても無駄よぉ。明日からあなたにはこっちに来てもらうからねぇ』
これは幻聴だ。宝石が喋るはずがない。
そう思ってセヴィスは眠った。

序章　真紅の宝石（後書き）

少し苦手な学園モノに挑戦しようと思って書きました。
そう思ってたら、怪盗モノと悪魔モノも混ざってきていろいろとカオスな話になりそうです（汗）
あと上手くいけば下手クソな差し絵も投稿していきたいです（笑）
文章も下手クソですが、
アトバイスがあればよろしくおねがいしますｏｒｚ

1　悪魔の世界

「おい」
ウィンズの声が聞こえる。
「おい、起きろ」
怒っているのか、語気が強くなった。
「起きろと言っているだろう！！」
はっとしてセヴィスが起きると、隣に眼鏡を光らせたウィンズが立っていた。
「いつまで寝ているつもりだ。貴様のせいで僕が仕事に遅刻したらどうする」
遅刻とはいえ、ウィンズはいつも職場に三十分以上前に着いている。今更遅れても何もない。
「俺なんか置いて行けばいい」
「駄目だ。成績最下位の貴様が遅刻したら、また保護者会で僕が面倒な目に遭ってしまう」
ラスケティア家に父と母はいない。優しかった母は病気で亡くなり、温厚な父は理不尽な事故に遭って亡くなった。なので、親の役目は全てウィンズが受け持っている。
それに比べてセヴィスは家では何もしていなかったが。
「僕はもう行くぞ。朝飯は下に置いてあるからな」
そう言って、ウィンズは部屋を出て行った。いつもの朝の風景だ。
「・・・・・・」
『ねえ、悪魔と戦ってみな～い？』
ふと、昨日の悪魔の言葉が蘇った。悪魔の頭領を名乗るサキュバスは、明日自分たちの世界に来てもらうと言っていた。
だが今日になっても、世界は何も変わっていない。
「やっぱり夢か・・・・・・」
セヴィスは、ベッドから降りて宝石箱を開ける。もし今までと世界

が変わらないなら、あの真紅の宝石は
必ずここに入っている。
セヴィスは宝石箱を開ける。
「！」
そこに、昨日盗んだはずの『ブラッド・エヴィデンス』の姿はなかった。
「ない」
辺りを見回してもそれらしきものはない。
もしかして、ここはサキュバスの言っていた違う世界なのだろうか。
それでも、『ブラッド・エヴィデンス』以外の宝石はちゃんと揃っていた。
「お～いセヴィス～！学校行こうぜ～！」
外から声が聞こえた。窓から顔を出すと、下に制服姿のハミルが立っている。
「ハミル？」
ハミルは昨日までと何一つ変わっていない。やはり世界は変わっていないのだろうか。
そんなことより、こんな時間に学校に行ってどうするのだろう、とセヴィスは思う。少なくともセヴィスが起きる時間に行っても学校は開いていないはずだ。
「えっ」
壁に掛かっている時計を見たセヴィスは驚愕した。
「お～い」
ハミルが呼んでいる。
「今行く！」
セヴィスの人生初の寝坊だった。

ウィンズの朝食を食べずに、セヴィスは外に出る。道路で随分待たされたハミルは少々機嫌が悪かった。

「セヴィスが寝坊、か。珍しいこともあるもんだな」
ハミルは変な目でセヴィスを見てくる。
「珍しいのか」
「だってよぉ、兄貴のせいで早く起こされるって面倒くさそうに言ってたのお前だろ」
「そうだな」
「おれなんていっつも夜はフレグランスのこと考えてるから寝坊はしばしばだけどな」
セヴィスは黙って歩き出す。ハミルはそれについて来る。
「・・・・・・」
「やっぱり警察を入口に集めたのは間違いだったな。いくら強い窓でも、怪盗フレグランスには敵わないってのか」
ハミルはまたフレグランスの話を始めた。セヴィスからすれば勘弁してほしいの一言だったが、それを言うわけにはいかないので、結局「どうでもいい」の一言で終わらせることしかできなかった。
今やセヴィスの口癖にもなってしまったこの「どうでもいい」は、ハミルが二度とフレグランスの話をしないようにするために言った言葉だった。無論それは、全くと言っていい程効果が無く、現在ハミルがフレグランスの話をしているのが現状だ。
「でもやっぱり信じられねえよ。あのセヴィスが寝坊って・・・・・・」
「しつこいぞ、ハミル」
「もしかしてさ、昨日悪魔に襲われたとか？」
ハミルの言葉を聞いた途端、セヴィスは横断歩道の前で足を止めた。
「悪魔？」
昨日の出来事をハミルが知る訳がない。セヴィスは無意識にハミルを睨みつける。
「そうだよ。最近、悪魔の野郎に襲われる人間が増えてるんだ。だから俺らが通うネクロス学園があるんだろ？」
ハミルは道路の真ん中で得意げに言う。

二人が通うネクロス学園は、至って普通の学校だ。悪魔という未知の生物と何の関係もない。
「ネクロス学園と悪魔に何の関係がある」
セヴィスは素直に思っていたことを言った。
「はあ？お前何言ってんだ？？」
正直なセヴィスの言葉を聞いた途端、ハミルは横断歩道の信号が赤になっているにもかかわらずセヴィスの方へ戻ってきた。
「寝ぼけてんのか？」
「っ！」
怒っているハミルから目を逸らしたセヴィスは、彼に迫るものを見て息を呑んだ。
前しか見ていないハミルは気づいていないが、物凄い速さで大型車が迫っている。さらに、車の運転手は眠っていた。これでは止まれない。
「ハミル危ない！」
セヴィスは叫ぶ。
だが、ハミルは大して驚く様子も見せず、ゆっくりと横を見る。車は既にハミルまで十メートルは切っている。
あれでは撥ねられる。
「へっこれくらい！」
ハミルが車と接触しそうになった瞬間だった。
セヴィスは自分の目を疑う。周りにいた人々も驚いて歓声をあげている。
「ハミル？」
ハミルは、車を右手の掌だけで止めたのだった。
「おれの魔力権に車なんかが敵うわけねえだろ」
「ま、魔力権？」
「セヴィス、何驚いてんだお前？いつものお前なら、いくらおれが自慢しても『どうでもいい』で終わらせるくせによ」
そう言われても、セヴィスはハミルが車を片手で止められる程の力

があるとは思えない。
「まあおれもお前の魔力権には敵わないけどな」
「何のことだ」
「・・・・・・お前さ、やっぱり悪魔に襲われたショックで記憶が飛んでるんだろ？ただでさえ驚くことがないお前がおれの魔力権でそんなに驚くわけがねえ」
「知らないものは知らない。その事実は何も変わりはしない」
ハミルは怪しげにセヴィスを見つめて、
「この世界で悪魔もネクロスも魔力権も知らない奴なんて重症だ」
と言った。
「なあ、お前本当にセヴィスなんだろうな？」
セヴィスは疑われるはずのハミルに疑われた。
サキュバスは言っていた。自分たちの世界のセヴィス＝ラスケティアと代わってもらうと。そんなことをして何になるのだろう。
セヴィスに交代する理由は分からなかった。
「おれとお前は、頭領サキュバスを始めとする悪魔の野郎を倒すために、ネクロス養成学校に入ってるんだろうが！」
「そう・・・・・・なのか」
このとき、セヴィスは確信した。この世界は、今まで自分が住んでいた世界とは違う、サキュバスの世界なのだと。自分は、本当に悪魔が住む空想のような世界に来てしまったらしい。
とりあえずこの世界のことを知るには、ハミルに嘘をついて聞き出すしかない。
「ハミル」
「あ？」
セヴィスが話しかけても、ハミルの不機嫌は治っていない。
「お前の言う通り、俺は昨日悪魔に襲われたのかもしれない。そんな記憶がうっすらと残ってる」
「やっと白状したか」
「だから、いろいろ教えてくれ」

「お前がおれに頼み事か・・・・・・まあお前が知らないといろいろと不便だしな。分かったよ」
ハミルに頼むのも気が引けるが、仕方ない。悪魔のことを知らないと、おそらくサキュバスに馬鹿にされるだろう。それどころか怪盗業にも支障が出るかもしれない。
もちろんこの世界の怪盗フレグランスのことは、ハミルから自然に聞きだせるので聞く必要はない。

「何から説明すればいいんだ？・・・・・・やっぱり悪魔からか。魔力権に関しては図書室で教えてやるからよ」
セヴィスに頼りにされて喜んでいるのか、ハミルは一人で考えている。
「悪魔っていうのは、この世界に住みつく奴らなんだけどさ、宝石『ブラッド・エヴィデンス』を主食としているんだ」
「宝石を？」
「そう。『ブラッド・エヴィデンス』を食べないと奴らは生きていけない。
十年前、悪魔は世界を支配しようとしたけどな、ネクロスという一人の男に阻止された。『ブラッド・エヴィデンス』はその時この国の美術館や宝石店に散らばったんだ。そのせいで悪魔は『ブラッド・エヴィデンス』を求めて夜に人間を襲ってる。奴らのやることは本当に甚だしいぜ」
真紅の宝石『ブラッド・エヴィデンス』。昨日セヴィスがそれを盗まなければ、この世界に来ることはなかっただろう。この世界でもその存在はかなりの影響を与えている様だ。
「宝石を渡せば済むってもんじゃねえ。どれだけの宝石を渡しても、悪魔の奴は必ず人を襲う。それに、
『ブラッド・エヴィデンス』を渡しすぎるとまた十年前のことが起っちまうまう。だから、ネクロスの様に悪魔から人を守るためにおれたちが通うネクロス養成学校があるわけだ。まあ悪魔に関しては

こんなもんか」
ハミルは丁度学校に着いたのを確認して、話を止める。
「じゃあ魔力権について説明してやるから、図書室に行こうぜ」
そう言ったハミルだったが、動こうとしない。
「どうした」
「あの子可愛いな。ちょっと待っててくれ」
「おい・・・・・・」
ハミルのナンパ癖はこっちの世界でも一緒だった。
「お嬢さん、おれと一緒に・・・・・・」
「あら？筋肉馬鹿のハミルさん？」
ナンパした少女は黙っている。言ったのはその隣にいた少女だ。少女は人を見下す目で、ハミルを見ている。
ハミルはこれが誰だか知っている。学園一の大金持ち、ルビア＝クォーツだ。
「えっ筋肉馬鹿？」
「そうそう。あなたはわたくしの一番嫌いな人種ですの。あなたの友人のセヴィスさまはいらっしゃらないの？」
セヴィスさまという表現にハミルは少し焼き餅を焼いた。
「セヴィスはあっちにいるけどさ、いくらなんでも筋肉馬鹿って・・・・・・ぐぇっ！」
鳩尾に肘を叩き込まれてハミルは苦しんでいる。そんなハミルに目もくれず、ルビアはセヴィスの方に走ってきた。
「昨日のお手紙、読んでいただけました？」
ルビアは昨日のラブレターのことを言っているのだと、セヴィスは理解した。
「ああ、読んだ」
「お返事を聞かせて頂けませんか？」
昨日の出来事のせいで、ルビアのラブレターのことはすっかり忘れていた。考える暇さえなかった。そもそもこの女と一緒にいたいとも思わないが。

「悪い。俺は女に興味ない」
と、セヴィスは素直に言う。これで諦めるのが普通の女。だが、
「うふふっわたくしは諦めませんわ」
ルビアには逆効果だったようで、ルビアは笑顔のまま少女と一緒に去って行った。
「全く、こんな俺のどこがいいのか分からない」
セヴィスは玄関でぼそっと呟いた。
怪盗フレグランスは女に嫌われているはずなのに、セヴィスは好かれていた。
そんなセヴィスをハミルが恨みの目で見ていた。

2　無知の怪盗

授業が始まる三十分前。ネクロス学園の図書室はたくさんの生徒で溢れているが、それを圧倒する数の本が並べられている。
魔力権について説明してやると大口をたたいたハミルは、大量の本棚から迷うことなく分厚い茶色の本を持ってきた。木製の表紙には大きく『魔力権の全て』と彫ってあった。
「こいつはすげえぞ。全ての魔力権がイラスト付きで危険度順に載っているんだぜ」
「危険度より先に魔力権について知らないと意味がない」
本を絶賛するハミルに対し、にべもなくセヴィスが言ったので、仕方なくハミルは説明し始める。
「う～ん。魔力権ってのは人間の誰もが持ってる力なんだけどさ、能力は自分で選べないし、はっきり言って運任せってやつ？魔力権は力を覚醒させないと使うことができないんだ。覚醒はこの学園を合格した後に貰える薬、『バレット』を飲むことでできる」
「バレット？弾丸を呑むのか？ハミルならともかく、そんなこと俺には到底・・・・・・」
「違う！そっちじゃなくて、そういう薬の名前なんだよ！！」
と、ハミルは大声で叫ぶ。
辺りが静まり返った。周囲の生徒の視線を感じる。妙な罪悪感を感じたハミルは生徒たちに小さく頭を下げて謝ると、再び話を始める。
「ごくたま～に自分で覚醒する奴もいるけど、死ぬまで覚醒しない人がほとんどなんだ」
「そんな奴がいるのか？」
「実は、この学園にも一人いるんだ」
「誰なんだ？」
「『バレット』を弾丸とか言った大馬鹿野郎」
ハミルは妖しげな視線をセヴィスに向ける。セヴィス自身も、驚い

て何も言えなかった。
「驚いてる場合じゃねえだろ。お前自分の魔力権も忘れたんだろ？」
「ああ・・・・・・」
魔力権を忘れていることをいいことに、ハミルは偉そうな態度をとる。そんなハミルの質問にセヴィスは肯定せざる負えなかった。
「まっおれの魔力権から教えてやるよ」
そう言って、ハミルは本の真ん中の辺りのページを開き、何度もページを捲る。
「あった」
ハミルが指を差した先に、男が頭上から落ちてきた巨大な岩を片手で受け止めている絵があった。その上には『運動物可変』と書いてあった。
「運動物可変？」
「そう。今朝の車みたいに、動いている物体に素手で触れることで止めることができる。生物とか地面は無理だな。あと刃物も無理だ。止めるどころか自分の手とおさらばしなくちゃいけないだろ」
「・・・・・・あまり役に立たないな」
「何か言ったか？」
「別に」
ハミルはむっとしている。
そんなハミルを無視して、セヴィスは本の最後の辺りのページを開く。危険度順に並んでいるなら、一番最後が一番危険なものに決まっている。そう思ったからだった。
一番最後に書いてあった魔力権の絵は、奇妙だった。
立っている男の両手から、無数の糸が放出している。そして、その糸の近くにいる人間たちは、皆炎に包まれてもがき苦しんでいた。名を『氣炎糸（きえんし）』というらしい。
「そいつは氣炎糸。手から放出した光の糸を操るんだ。その糸に触れた生物は燃えて死んじまう。いくら悪魔でもこいつを見ると脅えて逃げちまうだろうな」

ハミルが深刻な顔で説明する。その表情からこの魔力権の恐ろしさが分かる。
「酷い魔力権だな」
セヴィスは素直に感想を述べる。
「・・・・・・」
ハミルはしばらく黙っていた。その表情は怒りに燃えているようにも見えるが、セヴィスがそんなことを考える前にハミルは笑顔で、
「お馬鹿セヴィスにもさすがにこいつの恐ろしさは分かるだろ？なんたって、怪盗フレグランスの魔力権だからな」
と言った。
「フレグランスの？」
「ああ。奴は氣炎糸が物質を燃やせないことを利用してるんだ。柱に結びつけたりして逃げてるって親父から聞いた」
フレグランスの魔力権が氣炎糸なら、セヴィスの魔力権も氣炎糸ということになる。だが、ハミルはそれを言わなかった。幼馴染の彼が知らないわけがない。
セヴィスはハミルに小さく不信感を抱いていた。
「魔力権って、どうやって発動するんだ？って今思っただろ。こんなときは名言『どうでもいい』は言わないんだよな？」
「勝手に決め付けるな」
魔力権の発動方法は確かに知りたいが、今ここで氣炎糸を発動すると生徒を巻き込む可能性がある。なのになぜハミルはわざわざ教えてくれる様な口調で話すのだろう、とセヴィスは思った。
「へっおれはお前のことなら何でも知ってるからな」
と、ハミルが自分を左手の親指で差して言う。
確かにハミルはウィンズの次にセヴィスのことを理解している人間だろう。だが、二人とも重要な事実を知らない。フレグランスの正体がセヴィスだということを、彼らは知らない。
「魔力権は一度バレットを飲んでしまえば、自由に発動できるんだぜ。学校で使うのは教師の許可が下りない限り禁止なんだ。まあ使

ってる奴たくさんいるけどな」
「そんなに簡単なのか？」
「だがなセヴィス！お前だけはこの世界で絶対魔力権を使おうと思うな！」
ハミルは突然語気を強めて言った。
理由はセヴィスにも分かっている。氣炎糸を使ったら、人が犠牲になる可能性があるからだ。
「何で、俺だけ」
セヴィスはわざと知らないふりをする。
「そりゃ、お前の魔力権が人を殺すくらい危険だからだ。お前みたいな若い奴が警察署に入ってくるのは親父も見たくないんだよ」
「ミストさんはフレグランス特捜課ではないのか？他の犯罪は全く手を出さないんじゃないのか」
「えっああ、そうだったな・・・・・・ってそんなことじゃねえよ！とにかくお前は魔力権を使うな！いいな！」
そう言ってハミルは本を閉じて元の本棚に返した。
セヴィスは魔力権を勝手にハミルに制限されて苛々していたが、その氣炎糸も上手く使えば盗みに使えることが判明した。
そもそも、前までこの悪魔の世界にいたフレグランスが氣炎糸を使って盗んでいたのならば、使わない手は無い。
気になることが二つある。一つ目は自分が昨日までいた世界がどうなっているか。あちらのフレグランスは氣炎糸を放出して人を殺しているのではないか。だが、帰れないのならあちらの世界を考える意味はない。元々セヴィスは帰りたいとも思っていなかった。
二つ目は、サキュバスがセヴィスをこの世界に呼び出したことだ。どうも昨日盗んだ『ブラッド・エヴィデンス』が関わっているようだが、こんなことをして何の意味があるのだろう。
ハミルが言うには、ネクロスという男のお陰で国中の美術館に『ブラッド・エヴィデンス』が散らばっているらしい。それがあれば前のようにサキュバスと話ができるかもしれない。

それに、魔力権の使い方は知らないが、それを駆使する泥棒はなかなか面白そうだ。
セヴィスは、とりあえず現在の状況を知るためにこの世界の『ブラッド・エヴィデンス』を盗むことにした。

教室に入ると、見慣れた顔のクラスメート達がそれぞれ集団を作って楽しそうに喋っている。ハミルはその中に自然に混ざっていった。悪魔について何も分からないセヴィスは入口で突っ立っていた。とそこへ、
「あっ」
セヴィスを見つけた一人の少女が走ってきた。初めて見る顔だ。名前は知らない。女のわりに身長が高くて、赤い髪が印象的な少女だった。
もしラブレター関連ならこっちから断っておこうか。とセヴィスは考える。
「おはようございます。私、今日転校してきたレイラ＝ザインローズです。初めて会った人には挨拶をしているんです」
レイラと名乗る少女は、意外な言葉を口にした。
「ラブレター関連じゃないのか」
セヴィスの言ったことに、レイラは目を丸くしている。どうやら、挨拶の為だけにセヴィスのところに来たようだ。
「ラブレター？その様子だとたくさん貰ってそうですし、モテモテなんですね？よかったら名前を教えてください」
「セヴィス＝ラスケティアだ」
「ラスケティアって・・・・・・もしかして麻薬取締班のウィンズさんの弟さんですか？」
「麻薬って？」
「えっ違うんですか？でも珍しい苗字ですよね」
「何のことだ？」

戸惑うセヴィスに、ハミルが寄ってくる。
「悪いな。セヴィスの野郎は昨日頭がパーになっちまったんだ。代わりにおれが答えるよ。ウィンズはこいつの兄貴だ」
「頭がパー？どういうことですか？」
「まぁセヴィスは放っておいてさ、今日おれとデートしない？」
「えっ！？」
ハミルがナンパしている横でセヴィスは考える。
セヴィスはウィンズの職業を知らない。昔一度だけ尋ねたことがある。だが、
『貴様のような馬鹿には到底できない仕事だ！ふはははは！』
と馬鹿にされたのでそれ以来聞く気は失せた。
もう一つ気になることがある。ウィンズはこのネクロス学園の卒業生だ。だとしたら、彼もまた魔力権を使えるはず。彼は何の魔力権を持っているのだろう。
考えても仕方のないことだった。考えることすら面倒臭くなったセヴィスは、これから始まる授業のことを全く気にせずにそのまま机で寝た。

「セヴィス！！」
教師の怒鳴り声が聞こえる。セヴィスが目を擦ると、既に授業が始まっている。
「全くお前は！寝ても何にもならないぞ！ネクロスを目指す生徒は勉強あるのみ！」
教師の名はジャック＝バーレン。セヴィスたちの担任を務めるジャックは、正義感溢れる生徒の教育に一生を注ぐ生徒思いの教師だ。彼の熱意はこの世界でも変わらずの様だが、体を張って生徒を指導する姿は生徒の人気は集めている。
そんな彼もセヴィスからすればただの暑苦しい熱血教師だったが。
「ネクロス学園最強だからって、勉強しないのはただの馬鹿だ！」
「最強？」

斜め後ろに座っているハミルから、ため息が聞こえた。耳を澄ますと、自分をからかう噂話が聞こえる。どうやら他の生徒たちにも呆れられている様だ。
「寝ぼけてんじゃねーよ！この前の戦闘訓練で学園の生徒全員を一人でぶちのめしたくせによ！」
男子生徒モルディオ＝アスカが言った。モルディオはセヴィスが思うにハミル並みに短気で喧嘩っ早い性格をしている。どうでもいい思考で忘れていたが、一度くらい喧嘩はしたかもしれない。
だが戦闘訓練やら、一人でぶちのめしたやら、セヴィスには初めて聞いた言葉ばかりだ。
「戦闘訓練って・・・・・・」
「てめえのせいでみんな怪我したんだぞ！分かってんのか！」
モルディオは怒りをセヴィスにぶつける。この世界で何があったのか全く知らないセヴィスは、何も言い返せなくなった。
こちらの世界の事情なんて知らない。セヴィスは記憶上ハミルやその父ミストたち警察を除く人間に手を出したことは一度も無い。
「やめんかモルディオ！もう過ぎた事をセヴィスにぶつけてどうする！」
ジャックは再び怒鳴る。
「ジャック先生・・・・・・でもこいつは俺が必ず！」
モルディオは諦めたのか、黙って俯いた。
「セヴィス。お前の言う通り、戦闘訓練は確かに実戦の様にやるべきだと私は思う。だが、お前の戦闘経験は皆に比べて格段に多いし、お前の魔力権は危険すぎるんだ。手加減はできなかったのか？」
ジャックの話を聞きながら、セヴィスは同姓同名の人間に濡れ衣を着せられた様な気がした。セヴィスは戦闘などしたこともない。魔力権すら知らなかった。それなのに怒られるのは不愉快だ。
この世界には、前の世界と同じような出来事が起こっていると思っていたが、魔力権や悪魔が関する例外もあるらしい。
「まあ過ぎた事は仕方ない。悪魔防衛の授業を再開しよう。もうこ

れは四月からの半年間、毎日やっているからもう覚えただろう。
セヴィス、悪魔に出会った時にやること三カ条を答えろ」
ジャックは訳の分からないことを訊ねてきた。そもそもジャックは悪魔防衛じゃなく体育教師だったはずだ。前の世界での言い訳がこの世界で通じないというのはセヴィスも分かっている。
「瞬殺、抹殺、惨殺」
セヴィスは仮に自分が悪魔に対してやりそうなことを想像して適当に答える。と同時に、クラスの全員がどっと笑い出した。
右側を見るとモルディオも笑っている。
「馬鹿野郎！そんなことは我々ネクロスのやることではない！未だにそんな残酷なことが言えるのはお前だけだ！」
と怒るジャックの額には血管が浮かんでいる。
「俺はそんなこと・・・・・」
「もういい。ハミル、代わりに答えろ」
椅子が動く音がして、ハミルが言う。
「まず逃げる、戦力を得る、協力する」
「そうだ」
セヴィスが言ったことは完全に間違っていた。当然だとは思うが、代わりにハミルに答えられたと思うとやはり苛々する。
「セヴィス、お前は放課後職員室に来い。話がある」
ジャックはそう言って授業を進める。
時計を見ると、午後三時を指している。朝からこんな時間まで眠っていたことに驚くあまり、授業の内容は耳に入らない。今日は妙に寝てしまう。
授業が終わるまであと三十分もない。黒板を見ても、初めて聞く言葉ばかり書いてある。
「悪魔はブラッド・エヴィデンスを求める。最近有名な怪盗フレグランスも悪魔なのかもしれんな」
「ジャック先生、それは無いと思います」
呆然とするセヴィスの耳にジャックとハミルのやりとりが木霊して

いた。

3　銀髪の悪魔

「単刀直入に言う。お前を推薦した理由は、幼い頃覚醒した時に得た強さだけだ」
ジャックは真剣な眼差しで言った。
職員室内の小さな相談室で、セヴィスはジャックの説教を受けていた。その理由は具体的に分からなかったが、何となく予想はつく。おそらく、この世界に昨日まで居座っていたセヴィス＝ラスケティアが相当の問題児だったのだろう。今日来たばかりのセヴィスは怒られる様なことは何一つとしてしていない。
この理不尽でやり場のない怒りをどこに叩きつけようかとセヴィスは考えていた。
「このネクロス学園に入ったからには、それなりの・・・・・・」
セヴィスは話を聞かずに怒りを叩きつける場所を考える。
ハミルは、「今日フレグランスの予告！おれも参加できるんだ！やったぜ！おれが奴を捕まえてやる！」といろいろな生徒に自慢して帰った。
放課後、セヴィスは悪魔のことを調べるため、偶然学校の前を通ったミストに向かって窓から予告状を投げていた。今回ハミルが参加するのは予想外だったが。
内容は、
『本日十一時にジェノマニア美術館のブラッド・エヴィデンスをいただく』
と書いておいた。その後職場で予告状に気付いたのか、約十分後にハミルの携帯電話に『フレグランスの予告状が来た。人間が足りないからお前も来い』とのメール。それでハミルはすぐに帰った。
ウィンズはハミルよりも無理だ。前の世界のウィンズはセヴィスと喧嘩すると一発殴られて、負け惜しみに嫌味を言いまくる。要するに弱かった。

麻薬取締班はそれなりの戦闘力がないとできない、と帰り際レイラが言っていた。何もかも超越しているウィンズのことだ。物凄い強さを持っているに違いない。使ったことはないが、氣炎糸を使わない限り、彼には勝てないだろう。
結局セヴィスの遊び相手は、親子揃って鈍感なハミルの父ミストだけ。怪盗フレグランスの相手は警察しかいない。
そんな現実も、悪魔という未知の生物によっては変わるかもしれない。それは命を落とすことにもなるかもしれないが、別にどうでもいい。
セヴィスは命が惜しいと考えた事はない。この世界が面白くないからだ。
「お前にはルールを守ってもらわないと・・・・・・・おい、聞いているのか！」
ジャックが机を叩く。その腕に巻かれている時計は四時半を指していた。あと三十分以内に帰らないとまたウィンズの健康促進定食を食べる破目になる。
「ネクロスは民を守るための職業だ。生半可な気持ちで・・・・・・」
「そんなことどうでもいいだろ」
早く帰りたい一心でセヴィスが言う。ジャックの眉間に皺ができる。
「お前、以前よりも腐ったな」
と、ジャックが呟く。
「は？」
「以前のお前はどうでもいいと何度も言いながら悪魔退治には意欲的だった。お前の働きでたくさんの人が救われた」
「・・・・・・」
「だが、今のお前はただの殺人鬼だ！」
ジャックの怒鳴り声が職員室中に響いた。
「殺人鬼だと？」
と言ってセヴィスが睨みつけると、ジャックも睨み返す。

「そうだ。授業中モルディオも言っていたが以前の戦闘訓練、別名『クリムゾン・デビル事件』を覚えているか」
「知らん」
「覚えていないのか。それ程までお前は無我夢中だったのか？
そういえば丁度ハミルが風邪で休んでいた日だったな。だから奴は事件を知らないが、あれは大きな怪我をしない程度でやるはずだったんだ」
これはセヴィスという名の他人の話だ。
「だがお前は仲間だということを一切気にせず、全ての生徒の血を浴びるまで戦った」
今ジャックと話しているセヴィスは何もしていない。
残虐なことをしたセヴィスはこの世界にはいない。
事実がジャックには通じないことは端から分かっていた。何を言っても無駄だと分かっていた。
それでも怒りはどんどん溜まっていく。
「普段笑うことのないと思っていたお前は、あの時最後の一人になったモルディオに笑みを見せていた。あれは勝ち残ったことへの喜びの笑みではない。人をいたぶる時に見せる悪人の面だ」
「で、退学しろってのか」
「そうではない。話を聞け。
追い詰められたモルディオは言った。お前は真っ赤な血を浴びて笑う、真紅の悪魔とな。事件名『クリムゾン・デビル』はそこからきている。
私は『クリムゾン・デビル』を放っておくわけにはいかな・・・・・・」
ジャックが話している途中に、セヴィスは立ち上がる。
「どこに行く」
「帰るんだよ。もうすぐ五時だ」
「私は話をしているのだぞ！」
「黙れカス」

「何だと！！」
「一つ言わせてもらう。『クリムゾン・デビル』は俺じゃない。俺と同じ顔、同じ名前をした極悪人の仕業だ」
そう言ってセヴィスは職員室を出た。ジャックが追いかけてくる気配はない。

セヴィスが帰った後、ジャックは生徒の情報が書かれた書類を取り出す。その中から一枚だけ顔写真がない書類を眺める。
その生徒の書類は他の生徒と違い、学歴や両親の名が書かれていない。
「セヴィス＝ラスケティアか。過去が書かれていないところを見ると、あいつには何か重大な秘密がありそうだ。
う～ん・・・・・卒業生の兄、ウィンズ＝ラスケティアの方とは情報が噛み合わないような気がする。奴と兄弟というのもいまいち信じられない」
ジャックは書類を手に勢いよく立ち上がる。
「ふっふっふ。セヴィス＝ラスケティアの正体を暴いてやる。このジャック＝バーレン、久しぶりに燃えてきたわい！」
「ジャック先生、静かにして下さい」
女教師に怒られた。
「・・・・・すいません」

「ただいま」
家に入ると、腕時計は四時五十五分を指していた。どうやら、健康促進定食を免れたようだ。
安心したセヴィスが台所に入ると、ウィンズが相変わらずの鉄仮面を着けて料理をしていた。
「遅いぞ」
一人分の鍋を片づけたウィンズが言う。

「五時から二十九秒遅れたな。貴様の夕食はウィンズ様特製健康促進定食だ」
「ちょっと待て」
免れたはずなのに。焦ったセヴィスはウィンズに腕時計を見せつける。
「まだ四時五十五分だ。俺は遅れていない」
「その時計壊れているな？時計を見ろ。五時〇分四〇秒だ」
壁の時計を見ても信じられないセヴィスは、右手をのばしてラジオの電源を入れた。
『では、この後も引き続き怪盗フレグランス速報をお送りします。・・・・・ステイビー放送局が五時をお知らせします』
明るい女性アナウンサーの声と共に、時報が鳴った。
セヴィスの時計は確かに遅れていたが、家の時計も若干早かった。
フレグランスにとって時間は重要。ましてウィンズは家の時計を一秒でもずれるのを嫌っていた。
あれだけ正確に合わせてあった二つの時計がずれることなどありえない。
「兄貴・・・・・・」
腕時計の細工がウィンズの仕業だと分かったセヴィスは、既に健康促進定食が作られていることに気が付いた。
「そんなに俺に鍋を食べさせるのが嫌か」
「フッ」
ウィンズは鉄仮面を外して、
「貴様はこの僕よりも身長が高い。許せん」
と言った。
「言いたいことはそれだけか」
「それだけではない。貴様は今日僕が作った朝食を残した」
セヴィスが舌打ちしても、ウィンズの笑みは消えない。
「貴様の氣炎糸は僕には効かない。どうやって抵抗する気だ？」
「効かない？」

セヴィスは思わず聞き返した。
「僕の魔力権、『魔力権無効化』には最強の氣炎糸も敵わない。全く、そんなことも忘れたのか」
忘れたのではなく、知らない。危険度があるのだから魔力権は攻撃だけかと思ったが、防御専用の魔力権も存在するらしい。
ウィンズには氣炎糸は効かないらしい。そもそも氣炎糸の出し方も知らない。ハミルはバレットを飲めば自由に発動できると言っていたが、本当にそんな簡単ことで出せるのだろうか。
勝つ術を失くしたセヴィスに、怒る気はなくなった。
「餌が出来たぞ」
ウィンズからすれば、自分は家畜以下なのだろうかと思った。

今日は妙に苛々する。ミストを虐めてストレス発散してやろうかと考えたが、ミストに罪はない。そう思うと、『クリムゾン・デビル事件』で怒られたセヴィスも同じだ。
どうせなら上から目線の奴がいい。ウィンズや居場所の分からないジャックは無理だから、今回参加して調子に乗っているハミルか。ジェノマニア美術館は家から比較的近い。防衛情報はハミルから聞けていないが、前よりは楽ではないだろう。
セヴィスは宝石箱の近くに入っている服を取りだした。肩が出る膝に届くくらい長い黒ジャケットに、薄い水色のタンクトップ、黒のジーンズ、黒い長手袋、藍色のマフラー、黒のサングラス。
怪盗を始めた時、顔を隠す為に使った服装だ。最近は面倒臭くなって使っていなかったが、今日は来て行こうと思った。別にハミルに正体がばれるのを恐れているわけではなかった。

自分の家の窓から出て、家の屋根の上に飛び移っていくと、ジェノマニア美術館の近くに光が集まっているのが見えてくる。

セヴィスはこの辺りでは珍しい紫色の髪を持っている。そのため変装が苦手だった。侵入は窓を割るか壁を壊すしかない。
ブラッド・エヴィデンスがあるのは三階。窓の向こうに警官が立っているのが見える。そこに向かって、セヴィスが短剣を投げる。窓が割れて、警官が動揺する。
セヴィスは割れた窓から侵入し、素早く警官の腹を殴って気絶させた。
「窓が割れた音がした！奴だ！」
ミストの声が聞こえた。
この美術館には何度も来ているので、場所は分かっている。
セヴィスがブラッド・エヴィデンスの所に来ると、ミストの部下の男一人だけがいた。
肝心のハミルは何処にいるのだろうか。
「気をつけろ、俺。フレグランスは近くにいるはず・・・・・・あれ？」
男は自己暗示をかけている。
セヴィスは短剣を電気に向けて投げる。電気が消えた真っ暗な展示室に、ブラッド・エヴィデンスの淡い光だけが目立っている。
セヴィスはガラスケースを割ってブラッド・エヴィデンスを取った。
と同時に、
「ぎゃあああああああ！」
男の悲鳴が響いた。
セヴィスは驚いて、男の方を見る。噴き出した真っ赤な液体が頬に付いた。刃物が肉を刺す音が何度も聞こえる。
男は死んでしまったのだろうか。心配させる暇を作らせない程の殺気が感じられる。
暗くてよく見えないが、目の前に誰かがいる。
「誰だテメー？」
やる気のない声の主がセヴィスの方を向いている。セヴィスはとっさにポケットからペンライトを取り出して声の主に向ける。

「うぁっ！」
目の前に立っていたのは、とても人間とは思えなかった。
地面につきそうな長い銀髪、尖った耳、腰の辺りから出ている濃い紫色の槍の様な形の尻尾。手には、血が付着巨大なフォークのようなものが握られていた。
「何すんだよ！眩しいじゃねえか！」
「お前・・・・・・悪魔！？」
「あ～ん？何だテメー、オレを変な目で見やがってよォ？せっかくフレグランスの為に警官のクソッタレを殺ってたのになァ。悪魔がそんなに珍しいかよォ」
「・・・・・・」
悪魔は不気味な笑みを浮かべてフォークを肩に担ぐ。
「オレの名はA級悪魔シュバルツ＝ヴィロンだ。怪盗フレグランスってヤローを探してんだぜェ」
「フレグランス？」
「テメーがフレグランスじゃねーのならぶっ殺すけどよォ、ブラッド・エヴィデンスを取ったってことはフレグランスだなァ？」
「！」
「知ってんだぜェ？悪魔みてーな残虐さで有名なネクロス学園最強の『クリムゾン・デビル』。セヴィス＝ラスケティアだろォ？」
この悪魔、シュバルツは『クリムゾン・デビル』の方のセヴィスを知っている。放っておくと、危険を招く可能性がある。
だが、今のセヴィスに戦う術は短剣投げしかない。
せめて、氣炎糸が出せたらハミルの言う様に脅せるかもしれないのだが。
「なあセビ？何でテメーは悪魔しか触れないブラッド・エヴィデンスを取れるんだよォ？何で燃えねーんだよォ？教えてくれよォー！」
「知らん！」
投げた短剣が、シュバルツの頬を浅く切った。
「いってぇー！！テメーやりやがったな！」

シュバルツがフォークを右手に持ち替える。
「マジウゼェ！！聞くのなんてメンドくせェ！やっぱテメーぶっ殺す！！」
セヴィスは左手にブラッド・エヴィデンスを持って右手の指に短剣を四本挿む。
「死ねぇええ！」
シュバルツが跳躍した途端、ペンライトよりも眩しい光が視界に飛び込んできた。
「フレグランス！悪魔！動くな！」
二人が同時に振り向くと、懐中電灯を手にしたハミルが立っていた。

4　虚言の友人

「何だテメー。オレの邪魔すんじゃねーよ！」
シュバルツはフォークの血を振り払ってハミルに近づく。
「グランさんをやったのはお前かっ！？」
遠くからハミルが冷や汗をかいているのが分かった。
「誰だァそいつ」
セヴィスは考える。自分はブラッド・エヴィデンスを手に入れたのだから、この隙に逃げても大丈夫な気がした。だが、シュバルツがハミルに何をするか分からない。
ハミルという余計な存在がセヴィスを迷わせていた。
「動くな！親父が来たらお前は終わりだ！」
「テメーファザコンかァ？その親父、オレのせいで眠ってるけどなァ。まあもーすぐ起きるんじゃねーのォ？」
「眠ってるって・・・・・・お前親父を！」
「なあフレグランス～。こいつうぜーからオレ帰る。ミストのヤローはオレの催眠術で寝てるっての。フレグランスは今度たっぷり虐めてやるゼェ～・・・・・・ヒャハハハ！」
シュバルツはハミルに無防備に背を見せて歩く。
「あいつ、悪魔なのに羽がない！」
ハミルは驚いて懐中電灯を落とす。懐中電灯が落下した衝撃で故障した。
明かりが消え、部屋は再び暗黒に包まれた。
「じゃあなぁ～セっじゃなくてフレグランス～」
そう言って、シュバルツは割れた窓から飛び降りて行った。ここでセビと言われたらハミルに気づかれるかと思っていたセヴィスは少し安心した。
おそらく、あの割れた窓からシュバルツは侵入していたのだ。しかも、ガラスが割れた音がしなかったことから、セヴィスと同時に入

ったことが推測できる。
「おれがもう少し早くこればよかったのに！」
ハミルは地面に横たわる部下、グランの死体を見て悔やんでいる。
危険な悪魔シュバルツは去った。逃げるなら今だ。そう思ってセヴィスが動くと、
「捕まえないから待ってくれ！フレグランス！」
ハミルが呼び止める。普段なら無視して逃げるところだが、ハミルに捕まえる気はないらしい。
「グランさんをやったのは、お前なのか」
「・・・・・私は怪盗であり、人を殺す様な真似はいたしません」
セヴィスは、別人だと思わせる為に声色を使う。しかし、言いにくい敬語口調にしてしまったのは失敗だった。もう後悔しても遅い。
「そうだよな。お前はどんなに邪魔でも人は殺さないもんな。恐ろしい能力持ってるくせによ」
「無益な殺生は好みません」
「でも、フレグランスなんていう女々しい名前が付いてるからてっきり女かと思ってたぜ。お前、男だったのか」
「残念でしょうが、それが現実ですね」
「何で残念なんだよ」
「女の子、好きでしょう？」
「ぎくっ」
図星を突かれたハミルは何も言えなくなった。
「私が女だったら、貴方はどんな顔をしていたのか。最も、この暗闇では分からないでしょうが」
「そうだな。おれの懐中電灯が壊れなければお前の顔見れたのになぁ」
しばらく沈黙が続く。
ふとセヴィスの耳に微かな足音が聞こえた。ミストが起きたのだろうか。
「あの悪魔の言い分からして、まもなくミストさんたちが来るでし

ょうね」
セヴィスは沈黙を破って言った。
「そうだ、親父が来たらお前を捕まえられる！」
「貴方が私を捕まえるのは百万年早い」
「・・・・・・お前どうやって逃げる気だよ」
「簡単です」
とは言ったものの、セヴィスは逃げる方法を必死に探していた。
シュバルツが飛び降りた窓の周辺には跳躍できる範囲の建物がない。飛び降りたら間違いなく自殺行為だ。
最初は入口から出て逃げようかと思っていたが、ハミルという存在に邪魔された。
ハミルを振り切ったとしても入口から出れば、ミストと鉢合わせになるだろう。扉の外は電気が点いている。ミストはセヴィスの顔を何度も見ている。明りがあると正体がばれる。
「ここにフレグランスがいるはずだ！」
ミストの声が扉の向こうから聞こえた。
「てっきり氣炎糸を使うかと思ったけど案外潔くするもんだな。へっ年貢の納め時か？」
ハミルが言う。
「・・・・・・」
捕まるくらいなら死んでやるとセヴィスはいつも思っていた。
一か八か。セヴィスは、この世界にいた『クリムゾン・デビル』と『怪盗フレグランス』という存在に賭けることにした。
二人の同一人物が持つ魔力権、氣炎糸に。
「そっちに行ったら死ぬぞ」
ハミルの忠告など耳に入らない。セヴィスは割れた窓に向かって走る。
「命なんて、私にとってはどうでもいいものですからね！」
セヴィスは窓から飛び降りる。思ったより高いことに驚くと同時に、念じる。

氣炎糸が、近くのネクロス学園の時計塔に巻きつくように。
落下しながら、手を伸ばす。糸は出ない。
「っ！」
諦めかけた目に写るのは、切れて使い物にならなくなった電線。セヴィスはそれを掴んでなんとか着地した。
「はぁ・・・・・・」
表情は冷静だったが、セヴィスは一か八かの命の賭けにかなり焦っていた。今まで魔力権とは縁のない生活をしてきた人間には、氣炎糸は到底扱えるものではなかった。冷静に考えれば、セヴィスに使えるはずがない。
氣炎糸を使えるのはこの世界のセヴィスであり、バレットも飲んでいない自分は使えない。
サキュバスは何のためにこの世界に呼び出したのか、その疑問だけが頭を過ぎるばかりだった。

「突入！」
セヴィスが飛び降りたとほぼ同時に、ミスト達は部屋に入っていた。中には、呆然としているハミルと倒れたグラン刑事、割れたブラッド・エヴィデンスの入っていたガラスケース。
「しまった！」
ミストはグランの左胸に手を当てて、死んでいることを確認した。
「・・・・・・もう逝ってしまったのかグラン。天国で、幸せになってくれ」
他の部下にグランを任せて、ミストは尻餅をついて口を半開きにしているハミルに近付く。
「親父」
「グランの件は悔しいだろうが、殺人は私たちが出る幕ではない」
そう言うミストの目には涙が浮かんでいた。
「フレグランスは、逃げたのか？」

「ああ。あっちから飛び降りた。でもおれが来た時とか飛び降りる時とか、一瞬だけ姿は見えた」
「何だと？」
「男だった。身長はけっこう長身で、大体セヴィスぐらいだったかな。サングラスしてたから顔は分からない」
「そうか」
ミストはたくさんのカメラのフラッシュに囲まれ、死体が包まれて運ばれる様を目で見送る。
「他に何か分からなかったか？」
「そういえば、フレグランスと一緒に羽のない悪魔がいたんだ」
「悪魔？ブラッド・エヴィデンスを狙っていたのか？麻薬取締班に連絡しないとな」
「えっ何で麻薬取締班に？セヴィスの兄貴に頼ってどうすんだよ」
ハミルの頭に、偉そうに高笑いするウィンズの顔が浮かんだ。
「いいか？これは一般には知られていないことだが、お前たちが入学する際に飲んだ『バレット』、あれは悪魔の頭領サキュバスが作った麻薬だ」
「ま、麻薬！？」
驚いたハミルは大声をあげる。
「少しだけなら、魔力権を覚醒させるだけで何の害も与えない。だが、飲みすぎると中毒になり、人間性を破壊し、恐ろしい強さを得た狂気の殺人鬼が誕生してしまうのだ」
ミストは冷静に説明を続ける。
「そこで麻薬が出回るのを防ぐために、毎年ネクロス学園のエリートたちが麻薬取締班に入る。彼らは麻薬を取り締まると同時に、悪魔の出没情報を集め、市民が気づかない所で悪魔を倒している。市民があまり悪魔に襲われない理由はそれだ」
「何か、すげぇな」
「ハミル、お前も目指してみるか？」
「いや、おれは怪盗フレグランス特捜課に入るんだ」

とハミルが言うと、ミストは
「そうだな。それがいい」
と笑った。
フレグランスの愚痴をこぼしながら、スレンダ親子は家に帰った。

「命なんて、どうでもいい、か・・・・・・」
自分の部屋で、ハミルはフレグランスの言葉の意味を考えていた。
「セヴィスみたいなこと言う奴だな～・・・・・・じゃあ何で盗むんだよ！警察を困らせて楽しんでるのか？迷惑な奴だ！」
ハミルは怒って枕を押し入れに向かって投げた。枕はドンという音をたてて床に落ちた。
「氣炎糸の使い手は多くはいないし、体型もセヴィスに似てた。もしかしたら・・・・・・いやそれはないか。セヴィスはあんなキザっぽい台詞は言わねえし、まずあんなお馬鹿どうでもいい野郎に怪盗ができるわけがない。
いや待てよ、あいつは窓から飛び降りるぐらい運動神経いいし・・・・・・でも馬鹿に怪盗はできるもんじゃねえよなぁ」
疑ってもきりがない。面倒くさくなったハミルは、ベッドに飛び込んで寝た。

ハミルが家に帰る五分前。セヴィスは家の窓から部屋に入る。
手の中で輝くブラッド・エヴィデンスは、悪魔について知るために盗んだものだ。だが、サキュバスからの連絡はなかった。
これでは命がけで盗んだ意味がない。
セヴィスはブラッド・エヴィデンスを指でつつく。鈍い音をたてるだけで反応はない。
落としたり叩いたりしてみたが、効果はない。
「サキュバス・・・・・・」
セヴィスが諦めて座り込んだ途端、

『なぁ～に？偉そうに呼び捨てしないでくれる？』
と聞き覚えのある声が聞こえた。サキュバスだ。
「やっと返事したか」
『あなたねえ、もしかしてわたしと会話するためにブラッド・エヴィデンスを盗んだの？』
「ああ」
『馬鹿ねえ。そんなことしてもわたしが話さないと何の意味もないわよぅ？』
確かにそうだ。だが、セヴィスにはこれしかすることがない。
「馬鹿なのは元々なんだ。別に今更言われても落ち込む必要もない」
『ふ～ん。この世界に来ても何をすればいいのか分からないから、わたしに頼るんでしょう？』
「呼び出した張本人に言われたくない」
宝石の向こうから、サキュバスの笑い声が聞こえた。
『それもそうねぇ。あなたには何も話してないもの』
「俺を呼び出した理由とこの世界のことを全て教えろ」
『え～何で？知らない方が見ていて楽しいのよぉ』
セヴィスは黙ってサキュバスが諦めるのを待つ。
『仕方ないわねぇ。じゃああなたはネクロス学園の時計塔知ってる？』
ネクロス学園の時計塔は、学園のシンボルになる程大きな時計塔だ。一見ただの時計塔なのだが、内部に通じる扉が開かない。扉はかなり頑丈で破壊も不可能とされて、教師も生徒も時計塔の中は知らない。
内部構造が謎に包まれている時計塔だが、どうせ螺旋階段が頂上まで続いているだけだろうと思う生徒が多く、誰も調べようとはしない。セヴィスもそう思っていた。
「あの時計塔がどうかしたのか？」
『何で扉が開かないのか、気にならないかしら？』
「別に。時計塔なんてどうでもいい」

『今からあの時計塔の扉を開けてあげるわ。来てみなさい』
サキュバスの声はそれから聞こえなくなった。
首を傾げていたセヴィスはブラッド・エヴィデンスをベッドの下に突っ込む。家に帰れなくなっても、すぐに対処できるように制服に着替え、窓から飛び降りた。
何故、あの時計塔の開かずの扉をサキュバスが開けられるのだろう。セヴィスには、謎を知るためにサキュバスに従うことしかできなかった。

「おわっ！セヴィス何やってんだよ！？」
窓から飛び降りたセヴィスの目の前に、家に帰る途中のハミルとミストがいた。セヴィスは二人が近づいていることに全く気付いていなかった。
「セヴィス君、君には窓から飛び降りなければいけない用事があるのか？」
ミストが犯罪者の取り調べの様に訊ねる。
「窓から飛び降りるんて幼児でもしねえぞ。まずオレ無理だし」
高所恐怖症のハミルが言う。
セヴィスは制服姿でよかった、と心から安心した。これでフレグランス状態だったら。なんて考えたくもない。
「ウィンズにでも何か言われたか」
ミストはよくウィンズと対立する。その理由は、ウィンズがフレグランス特捜班を馬鹿にするからだ。自分はフレグランス本人と一緒に住んでいるくせに、
『はーはっはっは！あんな人間怪盗一人捕まえられないなんて情けない！』
とウィンズは自信満々に言っていた。
それからミストは妙にセヴィスに味方するようになった。
「あいつは自己中心的だからな」
せっかく振ってくれたウィンズ犯人案。これを利用しない手はない。

「僕を起こさずにコンビニエンスストアで朝食のパンを買ってこいと兄貴に言われた。だから窓から飛び降りた」
「やはりそうか。全く、ひどい兄だ。弟を何だと思っているんだ！」
ミストは拳を握りしめて怒鳴る。
「あまり大声を出さないでくれ。クソ兄貴が起きる」
「おお、そうだな。すまなかった。じゃあな」
そう言ってミストは家に帰る。ハミルは別れの挨拶もなしにミストについて行った。
二人が家に入ったのを確認すると、セヴィスは学校に向かう。

「あのウィンズが？あの神経質はパンを買い忘れる程間抜けじゃないよなぁ。でもセヴィスが嘘つくことってあるのか？今まで嘘をつくのも面倒臭いなんて言ってたし。
モルディオはあいつはただ者じゃないって言ってるけど、とてもそう思えない。
でも昔からどうでもいいばっかり言う奴だった。そういえばおれが会った時から両親がいないよなぁ。何であいつの両親はこんなに早く死んだんだ？もしかして両親の愛がなかったからあんな無愛想な奴になっちまったのか？
馬鹿なのはともかくとして、過去は分かんねえし、鍛えてもねえのに異常な運動神経持ってるし、しかも氣炎糸をバレットなしで使うのは何なんだ・・・・・・？」
セヴィスが学校に着いたのと同時刻。
ハミルは謎の多い幼馴染のことを一人で考えていた。
「おれ、もしかしたらフレグランスよりあいつの正体の方が気になってるのかもな」

5　地獄の時計

時計塔は、学校の廊下と直接繋がっている。
学校は、生徒たちを温かく出迎えるものだと思っていた。だがそれは表の姿であり、学校は人間の様に二つの姿を持っている。
普段セヴィスが何気なく通っている玄関。玄関は、一日の始まりを思わせる爽やかなもの。少なくともセヴィス以外の人間はそう思っていたはずだ。
「・・・・・・」
その玄関は、夜になると不審者を見張る番人と化した。
特殊センサーで人間を素早く察知し、伸縮自在の長い首で不審者を追跡する最新の監視カメラ。これは不審者の顔を見ることだけに特化したカメラで、通称『デッド・スネーク』と呼ばれる。全長は約十メートル。
いくらフレグランスでもこのデッド・スネークだけは対処法がない。短剣を投げて破壊しようとしても顔が映ったら意味がない。
今までセヴィスは宝石の近くにこれがあったら、どれだけ遠回りでも避けていた。
そのセヴィスの敵が学校の玄関に二台も設置されている。いつものようにここの窓を割るわけにはいかないので、セヴィスはデッド・スネークの監視範囲に入らない場所で侵入方法を考えていた。
セヴィスは避けることよりも、まずデッド・スネークを止める方法を考えた。
デッド・スネークは電線と直接繋がっている。電力を供給する電線を切れば動くことはない。
だが、そんなことをしたら近所の家や自分の家も停電になってしまう。
今になって思うことがある。先程逃げるためにビルから飛び降りた時、切れた電線があった。それがあったから、セヴィスは助かった。

何故、電線は切れていたのだろう。
もしかしたら、デッド・スネークは今動かないのかもしれない。
試しに、セヴィスは監視範囲に一歩足を踏み入れる。今までの経験から、一歩でも足を踏み入れるとデッド・スネークが動くことが分かっている。
「！」
さらにもう一歩足を踏み入れたセヴィスは、玄関で凍りついた。
全身を監視範囲に入れても、デッド・スネークは動かなかった。
「なぜ・・・・・・？」
考えている暇はない。
セヴィスは短剣で鍵穴を刺して破壊し、そのまま中に入る。
デッド・スネークが設置されているのは玄関だけ。後は監視カメラと警備員に気をつければいい。
時計塔と繋がる廊下は二階にある。

「ふぁ～あ」
階段の踊り場に着いた時、誰かのあくびが聞こえた。
「全く、どうして警備員ではなく私なのだ」
声と共に懐中電灯の明かりが近づいてくる。この声は教師ジャックだ。間違いない。
「こんな時間に学校に入る奴なんているのか？」
ジャックが階段を下りてくる。
「ん？」
ジャックが踊り場に写る人影に気づいた。
「おい！誰だ！」
セヴィスはとっさに踊り場から下に飛び降りて、玄関に戻る。待てと叫びながら走るジャック。懐中電灯の光が迫ってくる。
それを見て、セヴィスはさらに逆方向に走る。真っ暗な廊下に足音が響く。
ジャックに完全に不審者だと思われた様だが、警察に連絡はしない

だろう。ジャックなら、己のプライドというものが許さないのか必ず自分の手で捕まえる。そういう男だ。
巡回しているのがジャックだけなら、まだ不幸中の幸いかもしれない。
階段の反対側には、重機を運ぶためのエレベーターがある。人間用ではないため狭いが、他に逃げる道が無い。
「そっちに行っても逃げ道はないぞ」
ジャックが言う。
不審者はエレベーターのことを知らないとでも思っているのだろうか。
セヴィスはジャックに気づかれない様にエレベーターの『開』ボタンを押して中に入る。
「何をしに来たのかは知らんが、貴様も怪盗フレグランスの様には逃げられなかったな」
ジャックは壁に懐中電灯を向ける。
だがそこに不審者の姿はなく、ただエレベーターの音がするだけだった。
「どこに行ったんだ!?まさか幽霊か!?」
ジャックは辺りを見回す。怖さが増す。冷汗がこめかみをつたっていく。
「まっママぁ〜!!」
重機などに縁がないジャックは、エレベーターの存在を知らなかった。

警備員はジャック一人だったらしく、エレベーターの後は誰にも遭遇せずに時計塔に着いた。
重苦しい扉は、獲物を待ち構える様に開いている。
そして、一人の悪魔が扉の前に立っている。
「誰だ貴様は。名乗れ」
大きな翼を持つ悪魔が言った。かなり年老いた悪魔だが、服から見

え隠れする筋肉はかなり鍛えられている。
悪魔が人間に名前を聞いてくるということは、通ってもいい人間がいるという証だ。
サキュバスが来いと言ったのなら、当然セヴィスも通っていいはず。
「フレグランスと言ったら分かるか？」
「成る程。貴様がサキュバス様お墨付きのフレグランスか。私はD級悪魔ポールだ」
悪魔ポールはセヴィスを時計塔の中に入れると、扉を閉めた。
シュバルツがA級悪魔と名乗っていたことから、悪魔には格付けがあるらしい。そういえば、黒板に各が上がるほど強いと書いてあったような気がする。
だが、強さの基準が分からないと格付けを知っても何の意味もない。
「何故俺を呼び出した？」
と、セヴィスは歩くポールに尋ねる。
「今日は悪魔の裏切り者二人を、サキュバス様自ら罰を下すそうだ。元々貴様は呼ばないつもりだったがサキュバス様は処刑の様子を是非特等席で見てほしいとのことだ」
ぼんやりとした松明の前で止まったポールは冷静に答えた。ここは外見は時計塔でも、サキュバスの処刑場に続く廊下のようだ。
だがポールが止まった所は廊下と呼ぶには広すぎる。ネクロス学園の教室ぐらいの大きさだ。円状に松明が並べられていて、まるで闘技場のようだ。
こんなものあの細い時計塔に入りきるのだろうか。
「処刑？そんなもの俺に見せても・・・・・・」
セヴィスがふと足元を見ると、人間の頭蓋骨が落ちている。
「そうだな。ただの人間である貴様に知る必要はないだろう」
「どういうことだ」
「貴様はここで死ぬ運命にあるからだ」
セヴィスは壁を背に一歩後退する。武術の構えを示すポールからは強い殺気が放たれていた。

「何で俺が」
「サキュバス様の命令だ」
「サキュバスは俺に処刑を見てほしいんじゃなかったのか？」
「知らん。だが私に与えられた命令は、『フレグランスの抹殺』だ！」
と言って、ポールが走ってきた。わけが分からないままセヴィスはポールから突き出される拳を、とっさに体をひねって避ける。
相当の格闘術の使い手の様で、セヴィスが立っていた壁には、穴が開いていた。
右足が目の前で旋回する。その足がセヴィスの腹に一撃入った。
相手がD級の悪魔とはいえ、ハミルに殴られた時より数倍痛かった。
ポールは本気で殺す気だ。
戦わないと、殺される。人間なら罪だが、相手が悪魔なら殺すのに何の抵抗もない。
セヴィスは今までハミルを相手とした殺す気のない喧嘩しかしたことがない。ハミルの遅い拳なら避けるのは慣れているが、武器を使った戦闘は経験していない。
「クソ爺、アンタ後悔するぞ」
セヴィスは腰から四本の短剣を抜いて、右手の指に挟む。普段は盗むときに窓ガラスを割ったり電源を落としたりして使うものだが、これ以外に戦う術はない。
「やっと抜いたか、光物。それでこそこの闘技場で戦う者に相応しい」
ポールは激しく息を切らせて突進する。
だが、所詮は年老いたD級の悪魔。並の人間よりは格段に速いが、同じ人間であるセヴィスにも避けられるくらい遅い。
「うおおおおっ！」
横に飛ぶと同時に、四本の短剣を投げる。
四本のうち三本は壁に刺さって、一本はポールの左肩に刺さっていた。

「こんなもの！」
ポールは短剣を抜いて後ろに投げる。赤い血がセヴィスの足元まで飛び散った。
「貴様は人間だから魔力権を持っていないだろうが、この世界でバレットを飲んだ人間『デスパレット』と悪魔は魔力権を持っているのだ」
と言いながら、ポールは妙な構えをとる。セヴィスは、足元で気持ち悪い動きをするポールの血を見て後ずさる。
「私の魔力権は『煉獄血』。己の血を操るものだ」
地面に染み込んだはずの血が舞い上がる。それは集まって大きな球体を形作る。
「魔力権を発動するために、わざと一本だけ刺したのか」
「そうだ。私は老いのせいでD級となっているが、かつてはB級への昇格が期待された者。人間である貴様に勝ち目はない」
「期待された、であって実際は昇格していないんだろ」
セヴィスはなんとなく恐怖心が消えたような気がした。
こんなポールごときにやられたら、これから殺しにくるだろうA級のシュバルツには到底及ばないと思えてきた。
「生意気な餓鬼には死んでもらう」
ポールは両腕を下ろし、地面に右手の掌をあてる。
血の塊が、硬い球に変化した。
「これは自作のブラッド・エヴィデンスだ。人間はこれに触れるだけで燃え死ぬ」
「ブラッド・エヴィデンスだと？」
「貴様は知らんだろうが、ブラッド・エヴィデンスは悪魔の血から出来ている。本来は長い年月をかけないと悪魔が食べられる程の宝石にはならないが、年月が短くても燃やすことはできる！」
セヴィスはさらに四本短剣を抜く。
血の塊が破裂して、二人の上に降りそそぐ。
「死ね！」

以前サキュバスやシュバルツが不思議に思っていた。本人も理由は知らないがセヴィスには、ブラッド・エヴィデンスの炎は効かない。ポールはフレグランスがブラッド・エヴィデンスを燃えることなく盗んでいたことを完全に忘れて、油断していた。

「ぐぉっ！」

ポールの左胸に四本の短剣が刺さった。前のめりに倒れたポールは何も言わない。

飛び散ったブラッド・エヴィデンスの欠片は瞬く間に消えていった。

「悪魔でも、心臓はついてるだろ。後悔して死ぬのはアンタだったな」

セヴィスは短剣を回収して歩き出す。ポールの死体が動くことはなかった。

人間でない生き物を殺すのに抵抗はない。人と似たような形をしている悪魔も例外でない。少なくともセヴィスはそう思っている。

悪魔はともかくとして、生き物を殺すのに抵抗がないのはセヴィスだけではない。

子供は蟻を潰して遊び、害虫だからという理由でスプレーで虫を瞬殺する大人。なのに、犬や猫などのペットは可愛がられ、生きられる。

虫が死んでいても平気で見ている子供は、自動車に撥ねられた犬を見て泣いた。

悪魔はそれと似たような類で、人間の言葉を喋るのにハミルは殺してもいい存在だと言った。

セヴィスからすれば、ペットも害虫も自分の邪魔をしないのなら全部どうでもいい存在であり、逆に差別する方が面倒臭い。

そんな自分も、人間を殺せと言われたら殺せるのだろうか。

サキュバスの処刑場は五分くらい歩いたところにあった。

セヴィスが処刑場に入ると、巨大な翼を持つ女悪魔が一人で玉座に

座っていた。そして、右側には牢屋の中で腕を縛られた二体の悪魔がいた。
「随分遅かったじゃない。私これでも待っていたのよぅ」
セヴィスは声でこの女悪魔がサキュバスだと気づいた。地面にまで広がる薄い赤色が混ざった銀色の髪と赤い妖美な雰囲気漂うドレスが不気味だ。
「まあ仕方ないわよね。あなたは魔力権も持っていないし、ポールに勝てただけすごいわ」
「俺を試していたのか？」
「だって、この悪魔を殺したらあなたも死ぬのよ」
と言ってサキュバスは指で、向かって右側にある牢屋を指した。
中には凶悪な面をした悪魔がいた。よく見ると、左側にはシュバルツが捕えられている。
「出せっつってんだろ！クソヤロー！！」
シュバルツが叫んでいる。もう片方は不気味な笑みを浮かべたまま何も喋らない。
「私ね、あなたに提案があるのよぅ」
長い耳を指で塞ぎながらサキュバスが言う。後ろから「無視すんじゃねえ！」と聞こえた。
「ここにいるのはね、人間界から抜け出して来た『クリムゾン・デビル』よ」
「クリムゾン・デビル・・・・・・」
「そう。昨日までここにいたあなた」
そう言われても、目の前にいるのは自分とは全く似ていない。完全に別人だ。翼はないが、尖った耳と尻尾を持つ、悪魔だ。
「人間界の人間が死んだら、悪魔界（こっち）の同姓同名の人も死んじゃうのよねぇ。その逆ももちろんあるのよぅ。だからこのクリムゾン・デビルを殺すとあなたも死んじゃうのよぅ」
「これは俺じゃない。悪魔だ」
「彼はね、ブラッド・エヴィデンスを触れるからって食べちゃった

のよ。そうしたら悪魔になっちゃったのよ。しかもシュバルツなんかとは比べ物にならないくらい狂ってるの」
サキュバスは立ち上がってクリムゾン・デビルに近付いた。
「俺が昨日までいた世界とこの世界は同じ出来事が起こっているのではなかったのか？」
「悪魔関連のことになると同じ人間が変化することだってあるの」
「嘘だ」
「だからさ、提案があるのよ。あなたも彼も死ななくていい方法。そのためにデッド・スネークの電線切ってあげたのに」
セヴィスは信じられない光景を目にして喋ることもできなくなった。

6　真紅の複製

目の前にいる金髪の悪魔は、死を前にしても一つも脅えていない。
シュバルツの様に暴れる様な真似もしない。
それどころか、眠っていた。
「やっぱこいつら処刑するのや～めた」
と、サキュバスはだるそうに頭をかいている。
「意味が分からない」
セヴィスはぼそっと呟いた。
「何が？」
「この世界そのものが分からない」
「そうよねぇ」
セヴィスがこう言うのは既に分かっていたかの様に、サキュバスは頷く。
「じゃあ、十一時五十五分までの少しの時間だけ悪魔について教えてあげる」
時計を見ると、十一時五十二分を指している。十分に時間はあるが、ポールとの戦闘で相当時間を費やしたらしい。
「十年前のことです。学校の校長を務めるネクロスという若者がいました」
サキュバスは物語口調で話し始めた。話を聞きたいのか、シュバルツも大人しくなった。
「彼は何を思ったのか、人工の生き物を作ろうとしました。何をしたのかはわたしも知らないけど、実験は成功。人工生命体『アクマ』が完成しました」
「アクマ・・・・・・？」
「不思議な事に、アクマは人間と全く同じ姿を持っていました。アクマ作りにハマっちゃったお馬鹿なネクロスは、独身だった自分の為に好きなタイプの女のアクマを作りました。まあ実はそれがわた

しなんだけど。
わたしの餌に、ネクロスは別のアクマの血をあげていました。すると大変。わたしを中心に子供のアクマが大量繁殖しちゃったのよ。
それでネクロスは怖気づいて逃亡しちゃたのね。
アクマたちは生まれながらに持っていた魔力権という力でこの世界のコピーを作り、そこに自分たちの住処を作りました」
サキュバスが時計を確認する。時間はあまり進んでいない。
「コピーを作る必要があったのか？」
セヴィスが尋ねると、サキュバスは両腕を上げて知らない様なふりをした。知っているが、教えるつもりがないようだ。
「アクマたちの目的は人間たちが住む世界を支配することだったんだけど、何を思ったかコピーのネクロスがアクマの城に来たのよ。丁度そのときわたしたちは自由に持ち運べる食料を作ろうって、ブラッド・エヴィデンスを大量に作ってたの。
コピーのネクロスはアクマたちには敵わないからって、城のブラッド・エヴィデンスを盗み出して、一番宝石に対するセキュリティが高そうな宝石店や美術館に飛ばしたの。どんなに強くても、飢えには勝てないからねぇ」
再びサキュバスが時計を確認する。時間はあと僅かだ。
「食料を求めて、アクマたちは城を出て行ったわ。アクマの血を得られなくなったわたしは、人間をアクマにすることを始めたの。麻薬『バレット』でね」
「バレットって、魔力権を覚醒させる為の？」
「そう。バレットを一度でも飲んでしまえば中毒になって何度も飲む。純系のアクマとはちょっと違うけど、これでブラッド・エヴィデンスとしては十分使える悪魔『デスパレット』になれるわ。
コピーが『デスパレット』になったら、オリジナルの人間は死ぬのよね。
でもわたしはネクロスを殺したからって人間たちをなめてたわ。人間は逆にバレットを利用して、一度飲んでもデスパレットにならな

い様に改造した。しかも今は魔力権を持った人間で悪魔を倒そうとしてるの。それが『ネクロス学園』よ。
まあ純粋なバレットはまだまだ出回ってるし、麻薬取締班も大変よねぇ」
サキュバスが言いきると、丁度時計は十一時五十五分を指した。
「俺が聞きたいのは悪魔の歴史じゃなくて、この世界のことだ」
「あら冷たい。じゃあ教えてあげる。君が住んでいた人間界は、十二時に滅亡するわ。君も死ぬかもね」
「何だと！？」
普段は感情を表に出さないセヴィスだったが、この事実には驚愕した。
「悪魔関係を除く全ての出来事が同時に起こるはずだったのに、世界の理そのものを変える食い違いが起きちゃったのよぅ」
「じゃあこの世界の人間全てが死ぬのか！？」
「大丈夫よ。コピーは皆生きてるから」
サキュバスは笑顔のまま答えた。
「片方が死んだらもう片方も死ぬとオメーはさっき言っただろォ？セビはそれで頭の中が混乱してるんじゃねーの？」
と、シュバルツが口を挿んだ。
「いいえ。両方死んでないのよぅ」
「意味分かんネェ！」
「わたしが融合させたのよ。人間界の記憶は、コピーたちの中にうっすらと残ってるわ」
「マジ意味不明だっての！」
苛々するシュバルツを無視して、サキュバスはセヴィスの方に目を向ける。
「さっきの提案なんだけどね。あなたのコピー・・・・・今はシンク＝アルフェラッツっていう名前になってるけど、彼はわたしが融合させる前に悪魔界に来ちゃったのよ。彼と融合したら多分死なないで済むわ。

シンクは半分悪魔だから、十二時に何が起こるかは知らないけど多分いろいろと大変だと思うのよぅ。でもわたしはあなたたちに死んで欲しくないって今思えたのよねぇ」
そう言って、サキュバスはシンクを牢屋から出した。シンクはやっと起きて、目を擦っている。
「本来ならシュバルツがあなたを殺して一件落着のつもりだったんだけど、こいつが言うこと聞かなかったから」
「うっせー！サツが邪魔して来たんだよ！！」
シュバルツが叫びながら鉄格子を叩いている。だが鉄格子はびくともしない。
あの時はハミルが邪魔だったのではなく、シュバルツが面倒臭くなっただけだった。それを言えばシュバルツは処刑されるのだろうか。
「それは・・・・・・」
セヴィスは真実を言いかけて、止める。
今のセヴィスにシュバルツに味方する気は微塵もなかったが、言うのも面倒臭くなった。
「意味分からないでしょうけど、悪魔に抗ってちょうだい」
「お前、何が目的だ？」
セヴィスが聞くと、サキュバスは笑顔で言う。
「わたしは世界征服を楽しみたいのよぅ。そのためにはちょっとぐらい抵抗してもらわないとねぇ？
あなたはブラッド・エヴィデンスを触れるし、得意の盗みで悪魔の手から遠ざけることが可能よね？だから悪魔と戦ってみなさい」
「俺は悪魔と融合なんてしたくない」
「あら、そうなの？それだったら十二時の後のことはわたしも知らないわ。死んでもわたしのところに来ないでよ。
とりあえず、悪魔を倒すのがあなたたちの義務よ。君が生きていたらの話だけど。じゃあね」
サキュバスは手を振って、そのままどこかに消えて行った。同時に、シュバルツを閉じ込めていた鉄格子が外れた。

「勝手に決められたが、要はサキュバスをぶっ殺せばいいんだろ？」
しばらくしてシンクが初めて口を開いた。セヴィスと比べて、完全に声も口調も違っている。恐ろしく殺気が籠った声色だった。
「お前には、サキュバスの言っている意味が分かるのか？」
「俺はブラッド・エヴィデンスを食ってから結構変わったからな」
そう言って、シンクはシュバルツに近づく。
「サキュバスにお前とは比べ物にならないくらい狂っているって言われた時は、本当にてめえを殺そうかと思ったんだぜ。まあサキュバスの甘さがあって命拾いしたな」
「うっせー！黙れ！」
「所詮うるさいだけの、ゴミか。次があるとしても期待できないな」
「チッ・・・・・・テメーに次はねえんだからな！」
シュバルツは走って処刑場を出て行った。
「俺はどうなるんだ？」
セヴィスがシンクに尋ねる。
「そんなの運任せだ。まあ俺が食ったのがブラッド・エヴィデンスじゃなくてバレットだったらお前は死んでたな。つまり俺はデスパレットじゃねえってことだ」
「つまり人間界で死んだ奴は悪魔で生きてる可能性もあるということか？」
「そんなことより・・・・・・お前十二時になったら死んだりして」
シンクは冷静に答えた。
「まさか、そんなことが」
と、セヴィスが言った途端、時計塔の鐘が鳴った。
「十二時、だな」
シンクの声が聞こえた。
突然放たれた眩しい光にセヴィスは思わず目を閉じる。
五秒ほどの間を置いて目を開けると、目の前に人間姿のシンクが立っていた。

「あれだけ忠告されときながら結局死ななかったな、お前。しかも俺人間になっちまった」
シンクは感心しているのか、笑っている。
「意味が分からない・・・・・・どうすればいいんだ」
「知らねえよ。とりあえずサキュバスのクソッタレの言う通りにしな。そうすれば悪魔どもは自然に弱ってく。後は俺がこいつで悪魔どもを殺る」
そう言って、シンクは右手から無数の光の糸を放出した。セヴィスも初めて見たが、触れた者を全て焼き尽くす最強の魔力権、氣炎糸だ。
手の中に戻って行く氣炎糸を見て、セヴィスは魔力権のない自分が虚しくなった。
「お前、今自分のこと虚しいと思っただろ」
シンクは心を読んだかのように言った。
「・・・・・・なぜ」
「多分俺とお前は同一人物だから、多分思ったことを共有できるんじゃないのか」
セヴィスは黙って頭を抱えている。
「この力は悪魔をぶっ潰すのに役に立つと思うぜ」
確かに、離れていても彼と連絡が取れるのはいいことだ。そう思っても、何かが納得しない。
「俺はこれから外国に行こうと考えてたんだ。これなら連絡手段は必要ねえな」
「外国に？」
「これは俺が盗み聞きしたことだが、悪魔の本拠地はこの国にない。この時計塔はあくまでサキュバスの処刑場なんだ。本拠地の場所は検討もつかねえ。だから片っ端から悪魔を殺すしかねえだろ」
シンクは悪魔を殺すことに意気込んでいる。
セヴィスは何故自分が悪魔を倒さないといけないのか、ただ疑問に思うばかりだった。

家に帰ったセヴィスは、ウィンズから貰った『クレイル・トリニティ世界地図』を取り出した。初めて知ったことだが、この惑星は『クレイル・トリニティ』と言うらしい。
「こんなこと覚えてるのは兄貴だけだ」
これは一般常識だ。ウィンズはもちろん、子供も知っている。十五歳のセヴィスは今知った。
シンクは、
『まず南のファルシア大陸に行くか』
と言ってそのまま去って行った。彼の氣炎糸さえあれば、海を渡ることも容易だという。
「ファルシア大陸ってどこだ」
セヴィスは世界地図を貰ってからは一度も開いていなかった。開いてもどう見ればいいのか分からない。
勉強をしないセヴィスは、自分がいるこの国の名前は知っていても、大陸の名前は何一つとして知らなかった。
「ファルシア・・・・・・」
地図を逆向きにしたまま、下の辺りを見る。南は下だという彼の中の常識も、逆さの世界地図には通用しない。
『N』の文字の近くで、目に入ったのは北のミラーズ大陸にある『フリージア王国』の文字だった。似ているが、違う。
だがセヴィスは、気づかなかった。大陸ではなく王国だということに、気づかなかった。
「こんな小さな大陸、悪魔が出るわけがない。シンクは何を考えてるんだ」
同一人物なのに、シンクの方がまだ頭はいい。セヴィスはそんな現実を認めていなかった。
そんな時、
（おい、セヴィス聞こえるか？）

シンクの声が頭に響いてきた。
（ああ、聞こえる）
頭の中で返事をすれば、シンクに聞こえるらしい。今思えば、確かに便利だ。
（言い忘れてた。お前に頼みがある）
（何だ？）
（俺がいない間はお前がこの国の悪魔をやれ。昼ならネクロス学園の連中もいるし、大丈夫だろ）
セヴィスは、魔力権を使えない。できるのは得意の短剣投げだけだ。
（無理だ。ポールの時程上手くいくと思えない）
（無理じゃねえ、やれ）
（・・・・・分かった）
仕方なく、セヴィスはシンクの頼みを承諾することにした。夜、特にフレグランスとして活動する時に悪魔に会わなければいい話だ。
（それと、モルディオ＝アスカには気をつけろ）
シンクは意外なことを言った。
（モルディオ？）
モルディオは、セヴィスをライバル視する短気な男子生徒だ。いろいろな意味で邪魔だが、セヴィスに気をつける理由は見当もつかない。
（お前、俺が悪魔にクリムゾン・デビルって呼ばれてたの知ってるだろ？このことは人間は絶対知らないはずなんだ。なのに、奴はそれを知っていた）
（確かにそうだな）
（あいつは何かを隠してる。妖しいから気をつけろ。それとクリムゾン・デビル関係のことを聞かれたら俺に聞いてくれ。なんて答えればいいか教えてやる）
それから、シンクの声は聞こえなくなった。
セヴィスは、しばらくはどうでもいい思考をしないで済みそうな予感がした。

7　麻薬と少女

『ねえ、悪魔と戦ってみな～い？』
あの言葉を聞いてから、一ヶ月が経った。
それからは特に何事も起こらず、シンクからの連絡は異常なしばかりで、セヴィスはジャックに怒られながらも面倒な学校生活を送っていた。
何度かブラッド・エヴィデンスを盗んだこともあったが、シュバルツの邪魔はなく、毎回宝石の近くに立っていたハミルさえなんとかすれば楽勝だった。

現在、西暦３２１２年１０月２０日。
昨日は遠くの美術館まで行って、ブラッド・エヴィデンスを盗んだ。
今回はハミルに見つからなかったが移動に時間がかかって、すごく寝不足だ。
今日は多分何事も起こらないから授業で寝ようと思いながら、セヴィスは学校に行くために家を出た。少々寒いと感じるくらいの風が吹いている。
「やっべ寝坊した！」
セヴィスの前にある家から、ハミルがパンを銜えたまま走ってきた。
その様子を見て、セヴィスは少し羨ましくなった。
なぜなら、今日の朝食がウィンズ様特製健康促進定食の残り物だったからだ。朝からあれはさすがにこたえる。
「遅れてすまねえ！早く学校に行こうぜ！」
前からハミルは今日の学校を楽しみにしていた。
何があるのかはセヴィスは知らない。授業中寝ていて全く話を聞いていなかった。
手ぶらで来いと黒板に書いてあったことだけは覚えている。授業を潰さなければいけない程の何かがあるらしい。

「何かあるのか？」
セヴィスは、珍しく自分からハミルに話しかけた。
「えっお前知らねえのかよっ！？」
ハミルは目を見開いて驚愕している。
誰でも知っている常識を知らない人間を見た気分だとハミルは感じていた。
セヴィスに常識を教えたら日が暮れる、とウィンズが言っていたことを思い出したハミルは冷静になって話し始める。
「今日は、誰もが憧れる麻薬取締班との合同訓練だぜ？俺入学した時から楽しみにしてたんだ」
「麻薬取締班だと？」
セヴィスの頭の中で、麻薬取締班との合同訓練＝ウィンズがいるという方程式が成り立った。だが、今日ウィンズは、
『僕の職場では僕には及ばないが頭のいい先輩ばかりだ。貴様の馬鹿面（カヅラ）は帰るまで見なくていい』
と話していた。ウィンズが訓練を忘れるわけがない。
「麻薬取締班の人たちには仕事に集中してもらうために何も教えてないんだ。だからウィンズは何も言ってなかっただろ？」
ハミルは説明を補足する。
ウィンズは、今日も市民のために頑張るかと高笑いして家を出て行った。彼は、今日セヴィスが来ることを全く知らなかったのだ。
これで辻褄が会う。
「あー楽しみだな！楽しみだな！」
「・・・・・・最悪だ」
ハミルが飛び跳ねている横で、セヴィスは呟いた。
最悪な一日になりそうだとセヴィスが考えていると、通りすがりの老人が二人を見つけて奇異な表情をした。
この視線は、明らかにハミルに向けられたものではない。
老人は立ち止まったまま、ただ変なものを見る目でセヴィスを見つめている。

「ん？どうしたんだこの人」
鈍感なハミルも不思議に思ったらしく、首を傾げた。
「君が、セヴィス＝ラスケティアか。こんな若造だったのか」
このみすぼらしい服を着た老人とは初対面だ。なのに相手は犯罪者を見る軽蔑の目で見てくる。犯罪者ということに否定はできないが、この老人に恨みを買われるようなことはしていない。
「アンタ誰だ」
「・・・・・・死ね！！」
老人は人間の出せる精一杯の声で叫び、自分を支えていた杖を投げてきた。
「うおっあぶねえ！」
杖はハミルの魔力権によって空中で止められて、虚しく地面を転がった。無言で老人は地面に落ちた杖を拾って、そのまま去って行った。
「セヴィス、お前あの人に何かしたのか？」
眉間に皺を寄せたハミルが尋ねる。
「知らない。あの老人とは初対面だ」
「じゃああれは何なんだよ。いかにもお前を殺してやるって感じの顔だったぞ」
「バレットでもやってるんじゃないのか」
「まさか、あの歳でバレットは・・・・・・」
ハミルの話を聞きながら、セヴィスはシンクに話しかける。
一ヶ月前に彼は氣炎糸を使って島までたどり着いたが、ファルシア大陸の方角が分からなくなったらしい。そこで島に住む漁師を強迫して生活していたと聞いた。
自分が方向音痴なだけなのに無罪の漁師を強迫する。セヴィスには到底できそうにない。
シンクは昨日偶然見つけたファルシア大陸に向かう船に乗った。もちろん無賃乗船だ。今はファルシア大陸にいるらしい。
（シンク、お前老人に恨まれるようなことをしたのか）

（何のことだよ。俺は知らねえぞ。何かあったか？）
セヴィスはシンク以外ありえないと思っていたが、シンクのせいではないようだ。
（初対面の男性、いや老人に死ねと言われた。相当殺意が籠ってる）
（狂ってるのか？でもジジイの歳でバレットはないな）
シンクはハミルと同じことを言った。
（二日酔いでもしてんじゃねえの？）
（そうだと願いたいな）
と言って、セヴィスはシンクに話しかけるのを止めた。
「あ～あ。昨日もフレグランスの野郎に逃げられちまった。おれ最後に奴に会ったの一か月前だな」
ハミルはため息をついて信号の押しボタンを押す。
一か月前に、セヴィスが初めて魔力権の存在を知った交差点だ。
「命なんてどうでもいいなんて言いやがってよ。変な奴だよな？」
その変な奴にハミルは同意を求める。
「別にどうでもいい」
「この野郎、どうでもいいばっかり言いやがって」
信号が青になったのを確認したハミルは、セヴィスより先に横断歩道を渡る。
「フレグランスみたいなこと言うんじゃねえよ」
セヴィスはハミルの言葉を無視して歩く。すると突然、
「死ね！！」
右から老婆の声が聞こえた。横断歩道の中央で止まって右側を見たセヴィスは、息を呑んだ。
老婆の乗った車が、自分を撥ねようと猛スピードで走ってくる。
「危ない！」
ハミルがセヴィスの前に立ち、魔力権を発動する。車がセヴィスの目の前で止まる。運転していた老婆は気を失って、交通量の多いこの交差点はすぐに渋滞した。
「野次馬が来る前に逃げるぞ」

ハミルはセヴィスの腕を無理矢理引っ張って交差点を走り抜ける。
学校の近くの路地まで走ると、ハミルは足を止めた。
「お前、何したんだよ！」
さすがにこれはおかしいと思ったのか、ハミルは息を荒くして怒鳴る。
「分からない」
「これはどう考えても異常だろ！」
「分からないんだ。俺も」
「嘘ついてんじゃねえだろうな？」
「原因が分かるならすぐに改善してる」
ハミルはため息をついて、
「疑っても仕方ねえな。とりあえず学校に行こうぜ。原因が分かるまで変な行動は止めておこう」
と言った。
学校に行く際に若い人間とすれ違ったが、普通に通り過ぎるだけで何も言われなかった。今まで死ねと言ってきたのは、二人とはいえ全て年老いた人間だった。
玄関でルビアが話しかけてきたが、無視した。セヴィスは教室に入っても頭の中で何故と問うことしかできなかった。

同時刻。
地図を見ながらファルシア大陸の山脈を越えていたシンクは、一つの村にたどり着いた。
地図にも載っていない、ただの辺境の村だった。
夏なので雪は降っていないが、それでも寒い。相当高度が高いのだろう。
港から山に向け氣炎糸を木に結び付けて、着地。その後は、視界に入る中で一番遠くの木に氣炎糸を結んで飛ぶの繰り返し。車よりも

速い移動方法でもこの村に着くまで一時間かかった。
「ここで一泊泊めてもらうか」
シンクが村全体を見回すと、一軒だけ一際目立つ豪邸が目に入った。
他の家が貧相なのに対し、その家はまるで格が違う。
「おい」
シンクは豪邸の前で野菜を運ぶ男に話しかけた。
「な、何ですか？」
男はシンクの目つきに脅えながらも対応する。
「あの豪邸ってお嬢様とか使用人が大量に住んでんのか？」
「あっあの家は十歳のステナちゃん一人しかいませんよ」
「そいつは今いるか？」
「い、いますよ」
「そうか・・・・・情報ありがとな」
シンクが男から離れると、男は一目散に逃げていった。
「俺ってそんなに怖いのか？まっこの豪邸にガキ一人なら俺も泊まれるだろ」
そう言って豪邸の扉を押すと、鍵が開いている。中に入ると、暖炉の温かさと共に部屋全体が絢爛豪華なシャンデリアや調度品によって眩しい光を放っていた。
「お～いステナとかいうガキ～どこだよ～」
返事はない。
「来ないとぶっ殺すぞ～」
シンクが平然と恐ろしいことを言っても、ステナという少女からは返事はない。
「このクソガキが」
十歳の子供に対して焦れたシンクは、玄関の真正面にある大階段を一個飛ばしで上る。階段を上った先には三メートルを超えた巨大な扉がある。
こんな豪邸を持つお嬢様なら、一番大きな部屋にいる気がした。ただそれだけの理由でシンクは階段を上った。

扉を蹴って開けると、案の定少女がいた。
短い髪をポニーテールにまとめた少女は、ひたすらノートに何かを描き続けている。
「てめえがステナか？」
「そうだけど、何か用？」
ステナはシンクに目も向けず、手だけを動かしている。
「へえ、てっきり豪華なドレスを着た女を想像してたけど違ってたな。何ででめえだけこんな豪邸に居座って・・・・・・」
「知らない。それ以外に用がないなら帰って」
ステナは即答した。人と付き合うのも面倒くさいという感じだ。
だがシンクにも引く気はない。
「何描いてんだよ」
と言ってシンクはステナのノートを奪う。その時初めてステナがこちらを見た。
「返して」
「嫌だね。そんなに大切なものなら力ずくで奪ってみな」
ステナは黙って机から瓶に入った赤い液体を取り出した。
「何だそれ」
「ブラッド・エヴィデンスの原液。一滴でも触れたら人間は燃え死ぬ」
「ブラッド・エヴィデンスなんかで俺を殺す気か？恐ろしいガキだな～」
そう言いながらもシンクは笑っている。
「何がおかしいの」
「忠告。俺にそいつをかけたらお前死ぬぜ」
ステナは反射的に瓶のコルクを抜いて原液を振り撒いた。シンクにかなりの量が付着した。
ところが、一秒もしないうちにステナの顔が鷲掴みされた。
「は、放して」
抵抗しようとすると、長い爪が顔全体に喰いこんでくる感触を覚え

た。
「今すぐに自分の愚行を反省しな」
指と指の隙間から、シンクの右手の中で渦を巻く氣炎糸が見える。
「や・・・・・・めて」
指にさらに力が込められたと思ったら、シンクが突然左手を離し、ステナは地面に落とされた。
「き、氣炎糸の使い手だったなんて」
ステナがよろよろと起き上がると、シンクはノートを開いて勝手に読んでいる。
「これ、漫画か？気色悪りぃモンスターだらけだ」
ステナはシンクからすぐにノートを奪うと、机の中にしまった。
「氣炎糸の使い手は世界に三人もいないと聞いているわ。それにブラッド・エヴィデンスが効かないなんて何者なの？」
「俺はシンク＝アルフェラッツ。ブラッド・エヴィデンスに関しては俺もよく知らねえが、効かないのは確かだ」
「変わった名前」
「まあ同姓同名の奴と見分けるためにクソッタレがつけた仮名だからな」
顔に大量の原液を付けてシンクが笑う。
「氣炎糸使いなら彼を知ってるよね」
「彼？」
「クリムゾン・デビル、セヴィス＝ラスケティア」
ステナの口から思いもよらぬ名前が出た。
「そいつがどうかしたか」
「殺さないといけない」
「何でだよ」
「お兄ちゃんの邪魔だから」
「お兄ちゃん？」
ステナが殺そうとしているのは、氣炎糸を使うクリムゾン・デビルの方のセヴィス。つまりここにいるシンクのことだ。

だが、今殺されそうなのは人間のセヴィスだ。
それは分かったが、その兄が分からない。シンク本人もこんな危険な妹を持つ兄は知らない。
「もう計画は始まってるわ。彼は明日にでも死ぬ」
「だから何で殺されるんだよ」
「お兄ちゃんの邪魔だから」
「誰だよ、そのお兄ちゃんって」
「セヴィス＝ラスケティアを殺してきたら教えてあげる」
そう言って、ステナはマグカップに水を入れて飲む。
マグカップに注がれた、透明なポットに入った水。一見はただの水だが、その中で沈殿している赤色の葉を見てシンクは叫ぶ。
「止めろ！飲むな！」
「えっ？」
遅かった。既にステナは、麻薬バレットを飲んでいた。

8　阿呆と宝石

「今日は麻薬取締班との戦闘訓練があるよね？ウィンズ様に会えるとか楽しみだよ」
いつも以上に賑やかな教室でモルディオが言った。
普段モルディオは怒らなければほんの少し優しい口調で喋る。猫被っているらしいが、すぐ化けの皮が取れるのであまり意味が無い。
そんな彼は根っからのウィンズファンで、自分も麻薬取締班に入ろうと努力している。そんな彼の成績はウィンズの様に毎回一番だった。
モルディオに注意しろとシンクに言われたが、特に注意すべき箇所もなさそうだ。
「あんなクソ兄貴のどこがいいんだ」
セヴィスは張り切るモルディオに対し呟いた。
「君のような成績最下位の馬鹿には分からないだろうね。ウィンズ様を見習いなよ」
相変わらずの嫌味でモルディオは低レベルな争いを持ちかける。
「僕なんか、全ての魔力権は当然、ジャック先生の悪魔防衛の単語全部覚えているんだ。馬鹿の君には何が言える？」
辺りからモルディオに感心する男子の声が聞こえる。同時にモルディオを批判する女子の声も聞こえる。よく見ると、クラスのほとんどの人間が二人の周りに集まっていた。
成績一番のモルディオは男子には人気があるが、嫌う女子は多い。成績最下位のセヴィスは女子には人気があるが、無口であることや『クリムゾン・デビル事件』で男子には嫌われている。
このクラスは、いつの日か二つに分かれていた。
「あの、ジャック先生が来る前に席に戻りましょうよ」
中立派のレイラが仲介しようと中に割り込む。
「そうだぞ！やめろ！」

この中ではモルディオ側には入らないだろうハミルが言う。ハミルはセヴィスの味方をしているわけではない。ただレイラの味方をしたいだけだ。
「何か言ってみろよ？」
モルディオは既に本気になっている。さらに男子側から熱気が伝わってきた。
「アンタの様な雑魚と張り合うだけ時間の無駄だな」
セヴィスが言うと、モルディオの額に血管が浮き出てきた。
よくセヴィスが使う雑魚、下衆、屑の三つの言葉はモルディオの数多い逆鱗に直接触れる言葉だ。
短気で単純なモルディオは、セヴィスの思った通り机を拳で殴って、
「何だとてめえ！」
と怒鳴った。
モルディオが向かって来るのに対し、セヴィスは喧嘩をする気もなく席に座る。静かになった周りの女子と男子も座る。
「敵前逃亡か？え？」
この教室で立っているのは、モルディオだけだった。モルディオは、教室にジャックが来ていることに全く気づいていない。
「何でそんな静か・・・・・・」
モルディオがゆっくり後ろを振り向くとジャックが立っている。
「モルディオ！貴様また席を立っていたな！」
ジャックは自分が来た時に席に座っていなかったら、成績を下げる。それが分かっていたから、全員座っていたのだ。
怒りで我を忘れやすいモルディオはよく怒られる。なので一番真面目に受ける悪魔防衛の授業でも成績は一番悪い。
「ジャック先生！！すみません！！」
モルディオは必死に頭を下げる。
「貴様の成績はマイナス一だ」
「すみません！でもセヴィスの奴が」
「セヴィスは座っているだろう」

「うう・・・・・・」
ジャックの判断は常に公正で平等をモットーとする。これにはモルディオの得意の言い訳も通用しない。だが、ジャックが気づかなければ自然に差別をすることもよくある。
セヴィスが成績ではなくそれを利用して座ったことに気づいたモルディオは妙な敗北感を覚え、顔を机に密着させて落ち込んでいた。
「セヴィス、あのモルディオが落ち込むなんて相当だ。貴様何を言った」
ジャックは一応というような雰囲気で、セヴィスに尋ねる。
「俺は下等な争いを避けただけ」
セヴィスはモルディオと関わるだけ面倒臭いと考えているため、モルディオ関連のことはどんなことであろうと適当に答える。
この返答にジャックはいつもため息をつく。
「・・・・・・お前は人を馬鹿にするような言葉ばかり覚えているな」
「幽霊嫌いのマザコン教師に言われたくない」
「貴様、何故私が幽霊が苦手でママ・・・・・・じゃなくて母親が・・・・・・だということを知っているのだ」
誰にも知られたくなかったことなのだろう。ジャックはかなり焦っている。
セヴィスは知りたくもないことを、一か月前に夜の学校に侵入した際に知ってしまった。
「えっジャック先生ってマザコンだったんですか！？」
「しかも幽霊嫌いって、子供じゃあるまいし」
レイラとハミルが驚いている。
「知らなかった」
ジャックを尊敬していたモルディオを除く生徒たちが、どんどん冷めていく。
「ええーい黙れ！今日は本当に大切な麻薬取締班との戦闘訓練の日だぞ！朝からこんなに戯れてどうするんだ！」

ジャックは冷汗を掻きながら怒鳴る。
「ジャック先生、先生の背後に白い女の人が・・・・・・」
ハミルがふざけて嘘を言う。
「えっ・・・・・・」
ジャックは一人で震えながら後ろを見る。もちろん後ろには黒板があるだけだ。だが、ジャックは一人で怖気づいて、
「ぎゃあああああ！怖いよママぁー！！」
と叫び出した。生徒たちが耳を塞ぐ。
「教師ってのは所詮その程度か」
セヴィスは一言呟いた後、もう一度今朝の出来事を考えていた。

「おい・・・・・・」
シンクは、ステナが平然と飲んだものを見て驚いていた。
あれはまさしく、麻薬バレットだ。しかも、一般的に魔力権を得るだけのネクロス学園で飲まれる粉薬ではない。サキュバスが世界にばら撒いた、デスパレットになるためのバレットだ。
こんなに驚いたのは本当に久しぶりだ。自分がブラッド・エヴィデンスを食って悪魔になった時以来かもしれない。
「何を驚いているの？私はこれを何度も飲んでるのに」
ステナはバレットで狂う様子も見せず、ただ無表情でバレットを飲む。普通、バレットを飲んだ人間は十分ほど狂って無差別殺人を起こすと聞いたが、例外もいるらしい。
「なんだお前、中毒者（デスパレット）だったのか」
「そう。今更止めろなんて無理よ」
シンクは納得しながら、再びノートを描き始めたステナの背後に近寄る。
「なら、アレもあるよな？」
意味が分からずきょとんとするステナの背中から、紫色の物体が若干はみ出ている。シンクはそれを容赦なく引っ張った。

「痛いっ！やめて！」
「ははははっ」
悪魔の尻尾を手に持って、シンクが笑う。
尻尾は、悪魔やデスパレットの弱点だ。引っ張られると、物凄い激痛を覚える。
これは悪魔と人間の両方を持つシンクだからこそ分かったことだ。
悪魔の尻尾を引っ張るのは、一種の拷問でもあるためサキュバスが悪魔内で禁止している。
『女悪魔の尻尾を触ったらセクハラ同然よねぇ』
これも盗み聞きだがサキュバスはそう言っていた。さすがにその言い方はないだろうとは思ったが、悪魔だった時に尻尾を引っ張られたら本当に痛かった。
無敵と思われたサキュバスでも、尻尾は相当痛いらしい。
「俺はただ麻薬までやってセヴィスを殺して、てめえの何になるか知りたいだけだ。理由によっては惨い方法で殺すぞ」
「離さないと教えない」
さらに強い力で尻尾を引っ張る。
「教えねえと尻尾がもげるぞ」
「わ・・・・・・私が死んだらあなたの行動も全て無駄になるわよ」
強迫が、効いていない。ステナは、セヴィスを殺すことに全く罪悪感を感じていない。
「お前が死んだらその計画も終わりだぞ」
「う・・・・・・」
言い返せなくなったステナは、シンクに気づかれない様に机の下に付けられた非常用の赤いスイッチに手を伸ばす。
「早く言え！」
「嫌！」
ステナが叫ぶと同時に、非常ベルが鳴った。
「どうしました、ステナ」
扉が開いて五人の男が入ってきた。よく見ると、全員紫の尻尾を持

つデスパレットだ。
「この人を殺して！」
ステナが命令すると、男たちはそれぞれ武器を構える。一人は拳銃。後の四人は剣だ。
「ステナの命令だ。貴様を殺す」
「おい、何であんなガキにそんな権限があるんだよ」
シンクが後ろを見ると、本棚の隠し扉を開けて逃げようとするステナがいた。
「待てよクソガキ・・・・・・ってそんな暇もなさそうだな」
前を見た途端、剣を持った男が飛びかかってきた。シンクはそれを簡単に避けて、バレットの入った透明のガラスポットを投げる。
バレットを大量に服用したデスパレットはやはり普通の人間とは各が違う。今の一撃なら、普通の人間は死ぬ。だが、デスパレットたちはものともせずにかわす。
ポットが割れて、中のバレットが絨毯に染み込んでいく。デスパレットたちはバレットの独特の臭いに誘惑されながら攻撃を繰り返す。
「どんだけ麻薬やってんだよてめえら。C級悪魔並みだな」
シンクが喋っている間に、銃弾が発砲される。銃弾はシンクの隣を通って壁に穴を開けた。
シンクは銃弾を避けた直後に右手から氣炎糸を放出した。
「ぐぁあ！」
拳銃を持っていた男に氣炎糸が絡みつき、男はあっさり燃え尽きた。他の四人にも巻きつけると、どういうわけか効かない。
「氣炎糸か」
一人の男が言った。仲間が死んでも一つも焦っていない。氣炎糸が触れても燃えないということは、剣を持つ四人は全員ウィンズと同じ魔力権無効化の力を持っている。
シンクは極めて遠距離戦を得意とする。近距離も苦手ではないが、ハミルの様な格闘戦はそこまで得意ではない。
彼は敵と距離を取るために逃げることを優先する。そのためセヴィ

スの様に短剣は持っていない。だが、氣炎糸だけではウィンズの様に効かない相手も多数いる。
そんな相手を敵に回した時用に、シンクは氣炎糸の応用戦法を考えていた。
「こいつを試すか」
シンクは剣の攻撃を避けて、懐からトランプのような薄いひし形の刃を大量に取り出した。
それを頭上に投げて左手から出ている氣炎糸の先端に結びつける。
「なんだあれは」
男の一人が動揺している。
「あのクソガキは多分セヴィスが来ることを恐れて、無効化の魔力権を持つボディーガードをつけたんだな。残念だがその戦法は俺には通用しねえ」
「何を言っている」
「氣炎糸はてめえには通用しなくても、氣炎糸に付けた刃なら通用するだろ。重力に落とされることのない自由に操れる鞭だと思えばいい」
口を半開きにした男を切り刻む。
元はブラッド・エヴィデンスを盗むために頑張って考えた方法だが、まさか中毒者狩りにも役に立つとは思わなかった。
「ぐぇ！」
横から剣を振り上げる男を殺す。あと二人を殺そうとシンクが氣炎糸を振り回していると、
「おいおい、なんでテメーがいるんだよォ？」
部屋に愛用のフォーク型槍を持ったシュバルツが入ってきた。
反射的にシュバルツに剣を振り下ろした二人の男は、あっさり槍で貫かれ、事切れた。
「それは俺の台詞だな。最近現れないと聞いていたから死んだかと思ってたぜ」
シンクが氣炎糸を振り回しながら言う。

ボディーガードは全滅した。だがシュバルツが来るのは予想外だった。
「死んでねえっての！オレはブラエビを調達してただけだ！」
「ブラッド・エヴィデンスの略語か？センスねえな」
「うっせー！！」
シュバルツが死体の前にしゃがむと、シンクは氣炎糸を消滅させる。
「へっお前が殺った奴らのブラエビはいただくぜ」
そう言って、シュバルツはズボンのポケットから黒い円筒型の機械を取り出した。透明のキャップを外すと鋭い針が姿を現す。
悪魔なら誰もが持っている、『ＢＥ回収器』だ。
ブラッド・エヴィデンスは、本来悪魔の死体が一年経たないと出来ない。
だがこれを使うと、死んだ悪魔やデスパレットに刺すことですぐにブラッド・エヴィデンスを得ることができ、同時に死体が消える。
サキュバスが作ったこの機械は悪魔からすれば、優れものだ。
「ゲット～！」
横でシュバルツが喜んでいる。
シンクも一応持っているが、現在の彼は人間姿だ。もし今ブラッド・エヴィデンスを食べると、また尻尾が生えてきて悪魔と化すのだろう。
悪魔は人間に比べて体が軽く戦いやすいのだが、今のシンクに悪魔になるつもりはない。
デスパレットが麻薬を飲む度に寿命を削るのなら、シンクも悪魔になる度に寿命を削っている可能性がある。そう思うと人間で戦いたくなるものだ。
「オメーにも一個プレゼントしてやるよ。セビに悪戯するのには劣るがなァ、悪魔のテメーの残虐っぷりはオレ的にサイコーなんだゼェ」
と言って、シュバルツがブラッド・エヴィデンスを投げてきた。
「これで一ヶ月は持つし、久々にマキアビッツ大陸のセビに会って

くるぜ！じゃあな～！」
シンクがブラッド・エヴィデンスを投げ返す前に、シュバルツは部屋を出て行った。
「・・・・・・俺はガキを追うか」

8　阿呆と宝石（後書き）

余談ですがこの話、やけにサ行がつくキャラが多いんですよね（笑）
主人公とそのコピー、苗字に付く人とかあと悪魔にも数人・・・・・・。
それと若干性格がカブる人たちもいます。
今更ですがこの話を書いていて、
暁月麗華は後先考えない奴だと気づきました（汗）
今後気を付けます。

9　秀才と抗争

警察署のすぐ隣にある麻薬取締班本部。ネクロス学園を卒業した生徒たちは、大抵麻薬取締班の支部で悪魔退治をするか、政治関係の仕事に就く。警察を目指すハミルのような例外は少ない。
卒業生の中で成績が最良であったエリートは、本部で働くことになる。成績一番だったウィンズもまた、その一人である。
この学年はモルディオが本部就職になるだろうと騒がれている。
元々セヴィスがいた人間界のネクロス学園はこんなエリート校ではなかった。ウィンズの様な奨学金を貰って入学する者も多いが、基本的には金さえあれば誰でも入れる、私立校だった。
現在のネクロス学園は、悪魔を倒したいという意思と学力がないと入れないらしい。セヴィスが入れたのは、氣炎糸があったからだとジャックは言っていた。
だがその氣炎糸を持つのはシンクであり、セヴィスが持っているのは人間を超越した異常な運動神経と、狙ったところに正確に短剣を投げるという大道芸に近いことだけだ。

「楽しみですね！戦闘訓練！」
本部に向かうバスの最後尾。クラスで一番身長が高い者が座る席。
セヴィスはいつも一人でこの席にいたが、今日はレイラがいた。
「私、足手まといにならないように頑張らないと！」
レイラは拳を握り締めて意気込んでいる。
彼女は、浮遊の魔力権を持つ。生き物以外の物を浮かせ、自由自在に操る。レイラは魔力権で自身の武器を浮かせ、それに乗って移動できる。
彼女の武器は一見はただの巨大な筆なのだが、戦闘時になると棍棒に変形する。それを軽々と振り回すレイラの戦闘力は教師陣にも一目置かれている。

「そういえばセヴィスさんは、何の魔力権を持っているんでしたっけ？」
と、レイラが尋ねる。
「ハミルにでも聞けばいい」
セヴィスは適当に答えた。
「そうですか。まあ人に言えないことってありますよね！」
普通こんな態度をとられたら話す気が失せるとセヴィスは思っていたが、レイラは笑っている。
「実は私も相談事があって・・・・・・聞いてくれませんか？」
女の子の悩みと言ったら恋愛だろう。そんな勝手な偏見でセヴィスは、
「俺よりも女友達に聞くのが普通だろ」
と言った。
「友達に言ったらひかれちゃったんです。でもセヴィスさんは何事にも冷静ですし、聞いてくれるだけでいいんですけど」
「分かった」
レイラは話す心の準備ができていないのか、考え込む。
女子にひかれる相談事とは何だろう。セヴィスは一人で考える。
ナンパ男ハミルや上から目線のモルディオが好きだと言えば、確実にひかれるだろう。だが、そんなことではないような気がする。
「実はですね・・・・・・」
レイラが言うのを待ちながら、セヴィスは持っていたペットボトルの水を飲もうとした。
「私、怪盗フレグランスが好きなんです！」
レイラの言葉を聞いた途端、水が気管に侵入した。
「だっ大丈夫ですか！？」
咽るセヴィスを心配するレイラは、ジャックを呼ぼうとする。セヴィスはそれを腕で制止すると、少し落ちつくのを待った。
「少し咽ただけだ。それぐらいであのクソ教師を呼ぶ必要はない」
「あの、や、やっぱり変ですか？」

常に冷静なセヴィスが咽たので、レイラはかなり焦っている。
「フレグランスは、女に嫌われるものじゃないのか？」
「えっどうしてですか？顔を見たことはないですけど男性ですよね。かっこいいじゃないですか！」
「その・・・・・・宝石取ってるから」
自分の噂話をするのは面倒くさい。そもそもハミル以外の人間とフレグランスの話をするとは思っていなかった。
「私は、フレグランスはお金目当てで盗んでいるんじゃないと思うんです」
レイラはフレグランス本人の前でフレグランスのことを語り始めた。
「最近フレグランスは、ブラッド・エヴィデンスという悪魔の主食となる宝石ばかり盗んでますよね。そのせいかは知らないんですけど、悪魔に襲われる美術館関係者の人の数が減っているんです。もしフレグランスが悪魔から遠ざけるためにブラッド・エヴィデンスを盗んでいるのだったら、すごいことですよ。フレグランスが救世主になるんですよ」
「・・・・・・そうか」
「ハミルさんが羨ましいです。フレグランスの姿は彼しか見てないんですから」
怪盗フレグランスが宝石を盗む具体的な理由は、以前までなかった。ただ、言葉には言い表せない楽しさを盗みに感じたから、盗む。今はサキュバスやシンクに言われて、悪魔から遠ざけるために盗んでいる。レイラの言うことも、あらがち間違いではない。
「私、フレグランスの正体を知りたいです」
「もしフレグランスが爺だったらどうする？」
セヴィスは軽くレイラを試す。
「構いません。彼の存在は警察の方々には迷惑かもしれません。ですがフレグランスが年老いた人でも、素晴らしいことをやっているのに変わりはありませんから」
レイラの目に迷いはなかった。

その頃、身長差がほとんどないハミルとモルディオは、バスの中央付近に座っていた。
「だからさ、ウィンズの料理姿はやばいんだって！鉄仮面着けてるんだぞ！」
思い出し笑いしながら喋るハミル。
「いや、ウィンズ様に限ってそれはないね。馬鹿弟セヴィスと間違えたんじゃないの」
事実を冷静に否定するモルディオ。
この二人は大して仲がいいわけではないが、麻薬取締班との戦闘訓練ということでウィンズの話をしていた。
「どうでもいい野郎のセヴィスが鉄仮面着けるわけねえだろ！おれはラスケティア家でちゃんと見たんだぞ！」
「嘘だ。ウィンズ様が鉄仮面を着けるわけがない」
「本当だって！ウィンズ教信者かお前は！」
「ウィンズ様公認の宗教なら僕は入るよ」
二人が言い争っている最中、ハミルの隣の補助席にジャックが座った。
「ちょっといいか？」
「あれ、ジャック先生どうしたんですか」
モルディオはジャックの前になると背筋を伸ばし、すぐに態度を変えた。
「ハミル、お前はセヴィスと幼馴染だったな？」
「そうだけど、それがどうかしたか？」
「奴は兄のウィンズとどうしても情報が噛み合わないのだ。過去に関して謎が多すぎる。貴様何か知っているか？」
ハミルが考えていると、真っ先にモルディオが身を乗り出して口を開く。
「当然ですよ。あの馬鹿とウィンズ様に共通点があるだけで許せない」

「今はお前に聞いているのではない」
ジャックの冷たい一言でモルディオが黙り込んだ。
しばらく間を置いて、
「おれは、あいつの過去については全然知らないんだ。知ってるのはあいつが物心付く前に、両親が亡くなってたってことだけ」
ハミルは言った。
「奇怪だ。何故二人とも亡くなったんだ？」
「父は事故、母は病気だってウィンズが言ってたぜ。セヴィスも死因は聞いただけらしいし。でもおれも何か引っ掛かるんだよなぁ」
「そうだろ？奴は必ず何かを隠している。だから私は奴の過去を調べようと思っている。そのためにはどうしても人手が必要だ」
ジャックはそう言って、にやりと微笑を浮かべる。
「名付けて『バーレン探偵事務所』だ。お前たちも入るか？」
「入ります！」
俯いていたモルディオがすぐに手を挙げた。
「おれは・・・・・確かにあいつの過去も気になるけど、どっちかっていうとフレグランスの正体の方が気になるっていうか」
「事実は些細な事から見つかるかもしれないぞ？」
迷うハミルにジャックが無理矢理後押しする。
「セヴィスとフレグランスは繋がってないと思うんだけどな・・・・・・」
と言ったハミルの脳裏にフレグランスの言葉が浮かんだ。
『命なんて私にとってはどうでもいいものですからね』
どうでもいい。セヴィスがよく使う言葉だ。
もし彼に命について聞いたらどうでもいいと答えるのだろうか。仮にセヴィスがフレグランスだったとして、そう答えたとしても、セヴィスにとって宝石は必要なものなのだろうか。
自分がフレグランスの話をすると、大抵彼はどうでもいいと答えた。
セヴィスはフレグランスではないのだろうとは思える。
だが、友人として、特捜課課長ミスト＝スレンダの息子として、こ

の二人のことは知りたい。
ハミルはついに知りたいという欲望を押さえられなり、
「おれも、入る」
と言った。
「よし。では早速・・・・・・」

ジャックの話が終わると、丁度A組のバスは麻薬取締班本部に到着した。
「本部の方に話をしてくるから、待っていろ」
と言って、ジャックをはじめとする一年生の教師たちは、本部に一足先に入って行った。
「戦闘訓練ってどんなことをするんでしょうね？」
レイラは喋りながらバスの中から自分の武器を取り出した。彼女の筆は見るからに重そうだ。
大型の武器を持つ者は、皆バスの下に武器を入れていたらしい。細剣を取り出すモルディオの姿も見られる。短剣を隠し持つセヴィスや素手のハミルは使わなかった。
「さあな。俺は兄貴がいなければそれでいい」
「ウィンズさんってそんなにひどい人なんですか？」
「ああ」
セヴィスが後ろを振り向くと、隣のB組のバスから華やかな少女が下りてきた。まるでクラス全員を家来に従えるように、巻き髪の少女が堂々と歩く。ルビアだ。
「あら？」
ルビアはセヴィスに気づいたのか、杖を手に走ってきた。レイラはセヴィスがため息をついたことに気が付いていない。
「あれ、ルビアさん？B組はあっちですよ？」
レイラが言うと、ルビアは初めてレイラの存在に気づいた。
「あなた、随分身長が高いようだけど、まさかセヴィス様の隣に座

っていたんじゃないでしょうね？」
「はい！お話するの楽しかったです！」
レイラは純粋な少女だ。ルビアの言葉の意味を全く理解していない。
「彼の隣はわたくしって決まってたのよ！」
「えっそうだったんですか！？でもジャック先生がここに座れって・・・・・・」
「許せない！」
ルビアは耐えられずレイラの頬に思い切り平手打ちをした。
「いたっ！」
勢いに耐えられなかったレイラが尻餅をついたことで、周りから野次馬が集まってきた。さすがのセヴィスもこの光景には目を疑った。
普段ならどうでもいい思考で通り過ぎるところだが、自分のせいでレイラが理不尽な平手打ちを受けたと思うと、シュバルツによってグラン刑事が殺害された時より罪悪感を感じる。
「お邪魔虫にはビンタが一番よ！」
「お前・・・・・・」
グラン刑事は敵だった。だがレイラは邪魔になるわけではない。
「ねえ、セヴィス様？」
ハミルがいたら、なんとかなったかもしれない。だが、ハミルは遠くでモルディオと話している。
セヴィスはこのうざったい巻き髪を切ってやろうかと、短剣に手を伸ばそうとした。
すると、思ってもないことが起きた。
「ふ、ざけるな」
「？」
ルビアは声のした方を見る。そこにはレイラ一人しかいない。
「ふざけるなクソ野郎」
レイラが立ちあがって、ルビアの胸倉を掴んだ。
「なっ！？」
そこにいるのは先程までいた純粋なレイラではない。目つきが悪魔

のように鋭く、おぞましい殺気を放つレイラがいた。
「何がわたくしだと決まっているだ。そんなこと誰が認めた？」
首を絞める力が強くなる。ルビアに苦しそうな表情が浮かんでいる。
レイラが本気で殺す気に見える。生徒内での殺し合いはさすがに止めないといけない。
「止めろレイラ」
セヴィスは両手を使ってレイラとルビアを離す。
「やっぱり、セヴィス様はわたくしの味方ですわ・・・・・・」
「違う。俺はアンタに隣に座れと決めた覚えはない。こいつが叩かれる理由もない。俺からすればアンタの方が余程邪魔だ」
涙目のルビアから目を逸らし、隣にいるレイラを見ると、レイラはきょとんとしている。その表情は、元の純粋な少女の表情だ。
「あの、ルビアさんすみません・・・・・・そんな決まりがあるなんて知らなかったんです」
何も悪くないレイラは、ただルビアに謝っている。
「この二重人格女！覚えてなさい！」
ルビアは涙を拭ってB組に戻って行った。
「セヴィスさん、すみません。私、人から暴力を受けると、誰かが我に帰らせるまで止まらなくなってしまうんです」
「別に、謝ることはないだろ」
「でもセヴィスさんが止めてくれたから、戻れたんです！ありがとうございます！」
レイラは明るい笑顔を無理矢理作ってみせた。周りの野次馬たちは元の場所に戻って行く。

「よし！全員並べ！」
ジャックが来た。その後ろには同じスーツを着た麻薬取締班の班員たちが見える。
「現在班長が不在の為、彼が監督をするそうだ」
ジャックが言うと同時に、セヴィスは頭を抱える。モルディオは拳

を握りしめて喜ぶ。ハミルは笑いをこらえる。
班員たちの中から、マイクを持ったウィンズが前に出てきた。
「貴様等の監督はこのウィンズ＝ラスケティアだ。光栄に思え！はーっはっはっはっはっは！」
ウィンズの高笑いがうるさすぎて、マイクがハウリングした。ジャックや、八十人余りの生徒のほとんどが耳を塞いだ。
毎日聞かされている班員だけは塞いでいなかったが、そんなことも気にせずウィンズは堂々と腕を組んで仁王立ちしていた。

10　俊足と彼女

「いて！」
本棚をずらして見えた隠し通路。これは十歳のステナがやっと通れるぐらいの大きさで、ブラッド・エヴィデンスを食べてからセヴィスよりも身長が高くなったシンクは何度も頭をぶつけていた。
セヴィスの身長は百七十七センチメートルで、盗む際役に立つことはあった。
だがシンクの百八十五センチメートルの身長は便利なのかよく分からない。この場では逆に不便になっているような気もする。
何分ぐらい歩いただろうか。もしかしたらシュバルツは既にセヴィスがいるマキアビッツ大陸に向かっているかもしれない。
そんなことを考える余裕はあまりなかった。
「げ」
息を切らしたシンクの前には崖に近い階段があった。
階段は特にきつい。天井が低く、上下左右に岩肌が露出している。
さらに階段の段差が大きく、一歩でも踏み外したら服が破れて全身血だらけになるだろう。
慎重に降りようとするが、やはり無理だった。
「おわっ！」
シンクは一歩踏み外して、階段から転げ落ちた。
先程まで氣炎糸を振り回して笑っていた男が、階段を踏み外して怪我をしたという、なんとも情けない光景だ。
それでも、ステナのいる研究室らしき部屋に辿り着いたのは運がよかったかもしれない。
「随分情けない登場ね」
試験管を持ったステナが近づいてきた。その試験管の中には、先程見たブラッド・エヴィデンスの原液がある。
「まさか、ボディーガードを倒してくるなんて。氣炎糸は効かない

はずよ」
表情は変わっていないが、ステナは一応驚いている。
「俺は、氣炎糸で殺せない相手がいるってことを知ってたからな」
そう言って立ち上がったシンクは、転んだ時の全身の痛みに顔をしかめる。
「でもあなたは油断してる。一つ気づいていないわ」
「あ？」
「私の魔力権をね」
シンクはステナに警戒しながらも、まだボディーガードがいないか辺りを見回す。薬品や本棚だらけの研究室にボディーガードはいなかった。
「これを飲んで」
ステナは特に能力を発動する様子を見せず、ブラッド・エヴィデンスの原液をシンクに差しだした。
これを飲んだら、悪魔になる。悪魔になって寿命を削るくらいならこの女を殺す。
シンクは試験管を割ってやろうかと考えて腕を伸ばそうとした。だが、右手は試験管を持ちそのまま口に運ぼうとする。
「おいっ」
左手で押さえようとしても左手そのものが動かない。
「私の魔力権は『絶対命令』。一度だけ私の命令に従ってもらう能力よ」
ステナの冷たい視線が見える。
『絶対命令』。そんな能力があったのなら、氣炎糸よりも恐ろしい能力になるに違いない。シンクが思うに、この魔力権は自然に覚醒で得ることができないものだ。
だが、覚醒しないで魔力権を得る方法は知られていない。ステナは、シンクの様に生まれつき魔力権を持つ人間の可能性が高い。
「あなたの皮膚にこれが効かないのなら、内部に入れるまで」
ステナは、ブラッド・エヴィデンスを食べたシンクが悪魔になるこ

とを知らない。そのことに気づいたシンクは、無駄な抵抗を止めて原液を飲んだ。
美術館の宝石型のブラッド・エヴィデンスを食べると一週間は悪魔状態なのだが、少ない原液なら一時間ももたないだろう。ならいっそのこと悪魔になってこの女を殺す。
「お前、墓穴掘ったな」
「・・・・・・どうして」
ステナの目の前に、赤い目をしたクリムゾン・デビルが立っていた。

広大な土地を持つ麻薬取締班本部には、戦闘訓練用のグラウンドがある。ネクロス学園の生徒たちとジャック、麻薬取締班副班長ウィンズはそこに集まっていた。他の人間は業務に戻っている。
今日の戦闘訓練を楽しみにしていた者は心を弾ませている。だが、その期待はウィンズのこの一言で裏切られた。
「今から、百メートル走を行う！」
「は？」
と、思わずジャックが聞き返した。
「タイムが十秒以内に入れなかった者は、戦う資格もない。即退場、第一ジムでスクワット千回だ。いいな」
「ちょっと待てウィンズ。十秒はきついだろ。考え直せ」
ジャックがウィンズを説得する。
「関係ない。攻撃を避けられない奴など、足手まといだ」
「元担任の私は知っているぞ。クラス一運動音痴の貴様の百メートルのタイムは二十五秒。足手まといと言える立場か」
「知らん。始めるぞ。二列に整列しろ」
ジャックの説得も虚しく、ウィンズはジャックにピストルを投げ、自分はストップウォッチを持ってラインの上に立つ。
渋々並び始めた生徒たちから戸惑いの声が聞こえてくる。それもそのはずで、ウィンズは制服のまま走らせるらしい。

「おいセヴィス。お前百メートル何秒だよ」
偶然隣になったハミルが小声で話しかけてきた。
「五秒六だった気がする」
セヴィスは人間界でも最速だった。生まれつきの異常な運動神経があったからだ。これがあるから、盗みもできるようなものだ。
入学時陸上部に入れと勧められたが正直、賞はどうでもいいので帰宅部になった。
「おれ体操服で十秒三なんだよ！制服だとどうなるんだよ！ましてお前の超神経質兄貴だぞ！おれスクワットしたくねえよ！」
「筋肉馬鹿のお前には丁度いいんじゃないのか」
「ちくしょう！こうなったらヤケクソだ！」
ハミルが前を見ると、既に何人かが脱落している。何人かというより、ほとんどがジムに向かわされている。その中にはルビアの姿も見られる。
現在合格しているのはモルディオとレイラを混ぜた五人のようだ。きわどいタイムの人間も数多く見られたが、ウィンズの小数単位の厳正な判断で落とされた。
「貴様、〇．〇五秒遅れたな。不合格だ」
また生徒が何人か落とされた。
ふとウィンズが旗を挙げる手を止め、こちらに走ってきた。
「セヴィス、貴様はハンデだ。五秒以内でクリアしろ」
「は？」
「クリアできなかったらスクワット五千回、腹筋五千回、腕立て伏せ五千回だ」
「俺だけ随分過酷だな。差別だ」
「ふん。ならおまけで、このウィンズ様特製健康促進定食『特盛』をつけてやろう。特盛だ。いつもとは違うぞ。これで平等・・・・・・」
「いらん。あれを食ったら腹を壊す」
「なら五秒以内にクリアするんだな。はーはっはっはっは！」

高笑いしながらウィンズは元の場所に戻って行く。
「おいおい、五秒以内はねえだろ。大丈夫か？」
ハミルが冷汗を掻きながら言った。
「人の心配より自分の心配をしろ。異常な動体視力を持つ兄貴相手じゃ誤魔化すのは不可能だ。下手こいて五千回のトレーニングをするくらいなら俺は全力で走る」
「ははっお前がマジになるとこ初めて見たぜ！」
ハミルの顔から笑みが消えると同時に、ジャックの持つピストルの音が鳴った。

ウィンズのストップウォッチには『四秒八五』『九秒九八』と写っていた。
「二人ともかろうじて合格か。つまらん」
「戦闘訓練は兄貴の機嫌の為にあるんじゃないだろ」
「黙れ馬鹿弟」
そう言ってウィンズは旗を振り上げる。
セヴィスとハミルは合格者たちが並ぶ列の最後尾に座った。
「はぁはぁ・・・・・・あとほんの少し遅れたらスクワットだった・・・・・・」
「よかったね。僕は七秒で合格だったよ」
息切れが激しいハミルに、前に座っているモルディオがさりげなく嫌味を言った。
「うっせぇよ」
「まっ僕はクラス最速だからね」
「お前より、セヴィスの方が断然速いだろ・・・・・・」
「彼は問題外。僕が最速」
「意味分かんねえ・・・・・・」
セヴィスが確かに人間離れした運動神経を持っているとはいえ、このモルディオの言いようは変だ。まるで、セヴィスが人間であることそのものを否定したような言い草だ。

考えすぎかもしれないが、シンクがモルディオに気をつけろと言ったことに、何か関連があるかもしれない。
「僕とセヴィスは違うんだ。生い立ちも何もかも違うんだ」
モルディオは勝手に不可解な自己暗示を始めた。
セヴィスは、自分が六歳の時にハミルに出会うまでの出来事は一切覚えていない。両親の名も、両親がどのようにして亡くなったのかも知らない。
六歳までの記憶は、思いだそうとするとその部分だけが欠けたかの様に、思いだせないのだ。だがそれからの記憶は、鮮明に覚えている。
これには何かあるのではないかとは思ったが、自分の過去を知る方法などあるわけがなかった。ウィンズに聞いても『出来の悪い弟の幼少期など知らん』と言う。
ラスケティア家には写真アルバムがあっても写っているのは幼少期のウィンズだけで、自分や両親については本当に知る術が無かった。それ以降は考えても仕方ないので考えることはなかった。
「僕と彼女は同じで、セヴィスは違うんだ」
モルディオは霊に取り付かれたかのようにセヴィスを否定し続けている。
「彼女？お前彼女いたのか」
ハミルが聞くと、我に返ったのかモルディオの自己暗示は治まった。
「いや、違う。僕が一時期お世話になっていた家の幼い娘だ」
「お前とそいつとセヴィスが違うってどういうことだよ」
「今はセヴィスがいるから、この話は次の月曜日。さっき言ったジャック先生の例の場所で話そうよ。今は戦闘訓練に集中しよう」
モルディオが言う例の場所。それは学校の余った部室を使ったバーレン探偵事務所のことだ。探偵とはいえ、ジャックの好奇心でセヴィスの過去を探るための小さな組織だ。
セヴィスはこの組織の存在を知らないが、例の場所についてはハミルかモルディオを追跡すれば盗み聞きできると思っている。ハミル

やジャックはどうでもいいが、モルディオの話は気になる。
気づかれないように隠れるのは、フレグランスである彼が最も得意とする。
セヴィスは、二人を追跡する計画を立てていた。

「九人か。やはり少ない方が楽だな。よし、戦闘訓練をするぞ」
名簿を持ったウィンズが来た。
「二人ペアと三人ペアにして四つに分けるぞ。まずAグループはハミル＝スレンダ、モルディオ＝アスカ。Bグループは・・・・・・」
「ちっモルディオと一緒かよ」
ハミルが文句を言っても、ウィンズは完全無視してグループを決めていく。
「Cグループは、レイラ＝ザインローズ、チェルシー＝ファリアント。いや、かよわい女二人は駄目だ。セヴィス、貴様も入れ。で、残りの二人はDグループだ」
「かよわいって、頭脳だけのガリ勉ウィンズ言われたくないなぁ。まあいいや。とりあえずよろしくね」
近くに座っていたチェルシーが話しかけてきた。若草色の長い髪を右上で一つに縛っている、A組の明るい少女だ。
「あーあ。セヴィスと一緒がよかったなー」
「何でだよ？」
DグループのB組男子がこちらを見て話している。
「だってあいつ強いし、怪我しないで済みそうじゃん」
「確かにそうだよな。俺ら二人とも遠距離専門だし」
戦闘訓練では、毎年怪我人が九割を占める。
小さな拳銃二丁を持つ男子と大きなバズーカ砲のような銃を持つ男子。
二人が話しているのは、氣炎糸を持つシンクの方だ。そのシンクが現在遠くの国で、階段から落ちて怪我をしたというのは、知る由もない。

「何でモルディオなんだよ！おれも女の子グループがいい！セヴィスだけずるい！」
遠くでハミルが喚いている。
「あの筋肉馬鹿うるさいよねー。あ、そうそう。ジャック先生からの伝言。『氣炎糸は訓練にならないし危険だから使うな』だって」
と、チェルシーが言った。
「分かった」
どちらにしろ使えないものを禁止されても仕方ない。ならばこの訓練でセヴィスは生徒に初めて短剣を見せることになる。
ハミルはセヴィスもフレグランスも短剣を持っていることは知らないはずだ。
「でも、武器もないのにどうやって戦うの？まさか格闘とか？」
「俺のことは気にするな」
とは言ったものの、セヴィスに戦闘経験は少ない。悪魔ポールとの戦いは偶然自分にブラッド・エヴィデンスが効かなかったから勝てたものの、余裕を持てる程強くはないことは自覚している。
戦闘能力はシンクの方が上という運命は避けられないようだ。
だが、レイラやチェルシーたち女子に守られるという醜態は晒したくない。
「頑張りましょうね！」
レイラが言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2439y/

お馬怪盗と悪魔の麻薬

2012年1月8日22時48分発行